

# 山頂に叫ぶ

## 言葉の頭巻

去る五月三日、朝八時三十分から三十分間NHKテレビの「日曜散歩」で身延山のことが全国に放送されました。これを見られた人々の中には感銘を深くされた人も多かったことでしょう。私が最も強く感じたことは、小雨にけむる奥之院思親閣の山頂に立ったアナウンサーと解説者が対談した一幕でした。アナウンサーが尋ねました。

「若し日蓮聖人が現代に生きていたならば この山頂から天下に向って何と叫ぶでしょうか」解説者は言下に答えました。  
「おそらくへ釈尊に帰れ」と絶叫することでしょう 何と印象的な言葉であったことでしょう。私は強い共感に打たれました。そして「そうだ、なんだよ。日蓮聖人の魂は、今もなお此の身延の山頂から全人類に向ってへ釈尊に帰れ」と叫びつづけているんだよ」と、思わずコブシを掘りしめずにはおられなかつたことでした。

(白象)

—— 近 岐 5月増大号 目 次 ——

第2巻・第5号 通巻第11号

巻頭の言葉・山頂に叫ぶ	1
<我が出家の動機>	
孝道に生きぬく者	和田 吉弘 3
九州街頭布教紀行	編集部 13
<信仰相談室>	
何故信仰するのか	日高 白象 55
鷺峰行学講習会	編集部 62
新たなる人間形成	岩崎 征夫 77
△	
教義説明 親は十人の子をば養えど	12
夏季身延山青年行学講習会案内	76
読者へのお願い	79
編集後記	80

表紙題字・身延山法主藤井日静院下

表紙写真・インド靈鷲山へ渡る身延山金剛の釈尊像

表紙印刷・大阪東洋印刷社々長藤原秀憲氏寄進

カット・身延山身延教報編集部提供

# 孝道に生きぬく者

—その二—



身延山大学三年

弘吉田和

私の父は、現在、大阪府内（布施市菱屋西一九三の八番地）日蓮宗宝樹寺の住職です。私は、この寺で生れ、この寺で育ちました。

然し父は、その幼少時代を在家で過しました。父が仏門に入ったのは、実家が酒屋の事業に失敗した時でした。

父には兄弟が十人いました。事業に失敗した実家の生計は、たちまち、その日の生活にも困るようになりました。そこで四男であつた父が、これを契機として一念発起し、みずから進んで仏門に入ったのです。時に父は十二才でした。師匠は和歌山市の本行院住職和田龍恭師でした。

師匠夫妻は、世間でも「鬼夫婦」と謳口

をたゞかれるほど、弟子に対して非常に厳格な人でした。

たとえば毎朝、弟子の掃除がすむと、障子の模を指でなでて点検し、少しでもホコりがつくようなことがあれば、さっそく弟子一同を呼びつけては、

「このようなことで三宝さまに申訳ないと思ひませんか。それでも貴方がたは、日蓮大聖人のお弟子のつもりでいるのですか」と叱りつけることを常としていました。

ことは掃除ばかりでなく、炊事から日常生活のあらゆる点について、厳しく弟子をしつけ、若し怠惰なことがあれば、その都度、容赦なく厳罰を与えていました。

師匠としては、「給仕第一」の宗是を厳守し、

（仏弟子ではない）

へそういう者は、如何に才能があつても所詮、僧道を全うすることは出来ない。

へ故に、自分の弟子の中に、報恩給仕を怠るような者が、たとえ一人でもあつてはならない。またあつたとしたならば、これを容赦してはならない。何故ならば、そのこと 자체、三宝の恩にそむくことであるからだ。

という強い信念をもつていました。だからこそ世間の人々から、どんなに鬼夫婦と蔭口を言われても、意に介することなく、終始一貫、厳しく弟子を養成していくでした。

「給仕」といえば、一般社会では通常走り使いをしたり、お茶をくんだりする小使さ

何だか賤しいことのように思わしめられますが、本来「給仕」という言葉は、仏教用語であって、「三宝に仕えたてまつる」という、最も尊いことなのです。

剣道にしても芸道にしても、そのいずれの道にしても、それを習得するためには、指導者に対して心身ともに頗注し、絶対信伏、隨順するほどでなければなりません。

日常生活のすべてを通して、はじめて指導者の境地に到達することが出来るのです。

まして人格を中心とする仏教の悟道となれば、給仕が第一となって来るのも、蓋く当然のことです。仏道修行の第一は、難行苦行よりも、理論学究よりも報恩給仕に徹することです。

三宝に対する報恩給仕に一貫する中から苦修練行も起り、理論学究も起つて参りま

す。若し、これが逆になる時、仏教は枝葉末節へ走つて、本来の姿を失つてしまします。

師匠が弟子に対して、給仕即修行という信念をもつて、呵酷なほど給仕修行を厳正にした所以も、こゝにあつたのでした。

## 7

私の父は、自分から求めて仏門に入つただけに、どのような苦しいことにも、決して弱音をはくことはありませんでした。むしろ進んで作務を買って出るほどでした。

師匠には十三人の弟子がいました。その中でも父は、やがて師匠から、行学の両面において認められるようになりました。

師匠には男の子がなく、喜美といふ一人娘がいました。父は選ばれて和田家の婿養

子となりました。

然し師匠は、父が自分の子となつたからといって、弟子に対する態度は、ゆるむどころか、なお一層厳しくなり、多くの弟子の中でも、誰でも嫌う便所掃除は、常に父に課せられるようになり、他の弟子のあやまちでさえも、父の責任として叱られる有様でした。

父は将来の方針として学者になることを希望していました。然し、他の弟子たちとのふれあいもあって、なかなか大学へ進学する機会は得ませんでした。

やっとの思いで大学に受験することが許されたのは、昭和七年、父が二十三才の春でした。大学は関西大学でした。

然し、それでも他の弟子たちを刺戟してはならない、ということで遅に一日しか、

学校へ行くことが出来ませんでした。

父は負けず嫌いな性格でした。逆境であればあるほど、在学中は主席で通す決意で小さな板に、一という字を彫り込み、その板を肌身はなさず持っていました。そして人一倍勉強し、遂に在学中も主席で通し、卒業も主席であったということです。

ここにも、やり出したならば、どこまでも徹底的にやり抜くという、師匠譲りの厳しいものを感じることが出来ますが、父が師匠から仕込まれたように、私も幼少の頃から、父のこのきびしいしつりの中に育てられたものでした。

私は昭和十八年六月十四日、父が師匠のあとをついだ宝樹寺というお寺で、長男と

して生れました。その頃、一家は和歌山から大阪へ移っていたので。

私が生れて半年ばかり経った、その年の十二月、或る夜、急に私が四十度の高熱を出しました。医者の診断では、急性肺炎ということでした。

当時は第二次世界大戦中のことであり、戰火は、ようやく本土へ迫っていました。配給の食糧も乏しく、薬も思うように手に入らない状態でした。

私の病状は、一向にはかばかしくなく、高熱にうかされて乳も飲まなくなつたため母の乳房は、はれあがつて乳癌にかかってしまいました。また私は私で、すっかり栄養失調になつてしましました。

この時、父は十一月一日からの、日蓮宗一百日間の大荒行堂に入行していました。

頼るべき夫は、一步も行堂より出ることの出来ない結界修行に入つており、赤坊の私は、高熱の肺炎におかされた栄養失調、自分自身も乳癌にかかってしまった私の母のこの時の心中は、いかばかりであったことでしょう。

私の生命力は、ローソクの火の消ゆるが如く、日一日と細くなり、

「今晚は、あぶないかも知れない」と医者に言われるようになりました。

これまで、父の修行のさまでげになつてはならない、と独り堪え抜いて来た母も、遂に父へ事情を通知しました。

折り返し、父より返電がありました。その電文には、百日荒行の祈願を、私の当病平癒に捧げる、という意味のことが伝えられていきました。

事実、父は荒行中、規定の荒行日課以外に、更に私の病氣平癒のため、更に水をかぶり、更に經典を誦誦して、祈願をつづりたのでした。

日蓮宗大荒行堂の日課、朝三時の一番水から、夜十一時の七番水に至るまで、これを遂行することは容易なことではないといわれています。

然し父は、その困難な日課以外に、更に私のため、身を削って修行祈念をこらしつけたのです。それは、まさしく鬼神のような、すさまじい修行であったことでしょう。

今日か明日か、といわれた私の命が數日もてた頃、荒行堂から父の祈願をこめた護符が速達で送られて来ました。

来なかつた私が、不思議にも、その護符だけは飲み下したのです。そして、それからというもの、ミルクも薬ものむようになり、日々快方に向って、一週間もたゞない中に全快してしまいました。

また母の乳癌も良くなりました。全く信仰の力、父の祈りのたまものというほかはありません。

このようにして、生まれて半年たつばかりの、かよわい私の命は、大病に失われるばかりであったところを、奇蹟的に救われたのですが、思えば、このような出来ごとも、或は私が、成人してから出家の道へ入る前提であつたかも知れません。

出家の身となつたことを、自分ながらに尊く思う今日、曾つて父母より言い聞かさ

返すにつけ、

へ寺に生れた私が、こうした出来ごとにあ  
うのも、生れながらに仏門へ入らねばなら  
ない深い因縁があったのであらう。

と、つくづく思わしめられることです。

9

私は物ごころのつく頃から、既に僧侶と  
なる家庭教育をうけていました。実は私が  
生れる前から、

「生れた子供が男なら、僧侶にする」

と、父母も祖父母（父の師匠夫婦）も決  
めて、そればかりを楽しみにしていたそ  
です。

まだ舌も廻らない三才の頃から、お経を  
教え込まれました。教えるのは主として父  
と祖母でした。

小学校へ入学する前には、子供用のウチ  
ワ太鼓をうつて寒修行にも参加しました。

当時、私は恥しいことですが、よく寝  
小便をしました。そして、その都度、

「小便たれ」

と叱られました。私は叱られるが恐くて、

朝夕の勤経を、父母や祖父母と共にした時  
舌も廻らない声をはりあげては御宝鏡に向  
って、

「三宝チヤマ、お祖師サキ、ドウゾ賢イ子  
供ニシテ下サイ。小便タレヲナオシテ下サ  
イ」

と、お願いしていました。笑いごとでは  
ありません。子供ながら真剣だったのです。

そして幼稚園へ行く頃、既に袈裟、衣を  
つけて、父につれられてはお盆の棚経や法  
事に出かけていました。

また二月十六日宗祖降誕会に際し、大阪寺院が連合して、大阪駅から寺町のお寺まで二里の街頭唱題行進をした時も、袈裟、衣をつり、ウチワ太鼓をうって参加し、朝日新聞の記事に、写真入りで掲載されたこともありました。

そして小学校三年の頃まで、お寺でお題目講や、お会式などの大法要のあった時は参集の檀信徒の前で、日蓮聖人の御遺文の一節を、得意になって聞かせたこともありました。当時の私は、出家に対して強い憧れをもっていたのです。

昭和二十七年四月二十八日、それは立教開宗七百年の式典が、全宗門をあげて挙行された日です。この日、私の得度式が行われました。私は小学校三年生でした。

態度は一段と厳しくなりました。父の厳しさは、得度式をした以上、はや仏弟子となつた者に対する、それでした。

たとえば朝の勤経にしても、幼稚園の頃から毎朝五時より一時間あまり、父と共にしていましたが、得度式以前にあっては、時々一度は父に起されて、そのまままた寝床にもぐり込んでしまうことがあつたとしても、それほどひどく叱られるようなことはありませんでした。

然し得度式以後にあっては、勤経をさぼって、また寝床の中にもぐつていようものなら、引きずり起された上、こっぴどく叱り飛ばされたものです。その時の大喝は何時も同じでした。

「お前は仏弟子であり、日蓮聖人のお弟子

人に申訳ないと思わないのか」

この言葉は、曾って父が、修行時代父の師匠から耳にタコの出来るほど言われたものであったのです。父は、師匠の厳格な教育法まで継承して、私の教育に当つたのでした。

私が朝勤をなまけるようなことが続くと数発の平手打ちや拳骨が、顔や頭にあびせられ、朝御飯も食べさせてもらえず、泣く泣く学校へ行つたこともあります。

冬になると父は、毎年のように十一月一日から翌年の二月十日まで一百日間を通して、毎朝必ず本行したものですが、朝の五時といえど、まだ暗く、冬の寒さをいとえず、あたたかい布団から抜け出ることが出来ず、モゾモゾしている中、つい眠ってしまふと、朝勤から帰つて来た父に、布団を

めくられ、寝間着姿のまま水行場へ引っぱり出されて、氷の浮いた寒水を数杯、頭からあびせられた上、ずぶぬれのまゝ寒氣骨身に徹する庭に立たされて、ガタガタ胸ぶるいしていたこともあります。

また学校から帰ると、一時間ばかりお経の練習をするまでは、家から一步も外へ出してもらえず、おやつも貰えませんでした。

また遊びに夢中になつて、日が沈むまでに家に帰つて来なければ、家の内に入れてもらえず、本堂の傍の下や、物置小屋の蔭にかくれて、泣いていたこともあります。

そうした時、何時も私をかばい、やさしくさとし、励ましてくれたのは母でした。母の慈愛は、深く私の心に焼きつきました。

大きくなつたら、きっとお母さんに孝行

じよう。私のお母さんのために、出来る限り親孝行をしてあげねばならない

と思うようになりました。

然し父に対しては、その厳しい教育が、実は慈悲の鞭であったのだと、今でこそ感謝出来るのですが、当時としては、たゞこわい一方でした。

お蔭で、父の厳格な教育と、祖母に手ほどきされたお経練習で、小学校を卒業する頃には、法華経の要品も読めるようになり、一応の行儀作法も身につけることが出来るようになっていました。

へ以下次号へ

### 敬 築 説 明

親は十人の子をば養ふども  
子は一人の母を養うことなし

この言葉は、日蓮聖人が身延在山中弘安三年十月二十二日、尾張刑部左衛門の女房が、母の十三回忌に、錢二十貫を供養したことに対する、御返事の中の一節です。

なお、この直ぐ次には、

「あたたかなる夫をば懷きて臥せども  
こぶえたる母の足をあたたむる女房は  
なし」

と申されています。まことに三思すべき教えではありませんか。

# 九州街頭布教紀行

## 最終回

これは単なる紀行文ではない  
この中の挿話こそ読者の胸  
を打つものがあるだろう



### 調査部

十八

九州街頭布教の第二日目は、北九州の枝光、戸畠、若松、折尾、直方、飯塚という六都市の布教。

各都市は近接しているとはいえ、一日の中、これほどの地域を布教してしまうには貸切バスをフルに利用するほかはない。それにしてもスケジュールはギリギリ、強行軍である。

朝八時三十分、身延山布教別動隊が一泊した八幡の龍潛寺山門前には、飯塚より昨日に引きついでいて龍王寺住職福山日種法尼が、檀信徒およそ二百名を動員、大型貸切バス三台に分乗して到着。

聞けば龍王寺の檀信徒は、その日未明の四時、龍王寺に集合し、バスで長崎、定刻の九時前、龍潛寺山門前に到着したのだと

いう。

布教隊は、こうした檀信徒の熱意あふれる協力に、斗志ますます燃えあがり、八幡地区の寺院各堂、総代、世話人とと共に、もう一台待機していたバスに乗り込み、定刻の九時、一行は龍潛寺の伝道カー、四台の

バス、數台の自家用車をつられ、龍潛寺の檀信徒に見送られて山門を出発。その日の集合地点、枝光の宮川公園へ向った。

宮川公園では、既に宗務所長木島智境師をはじめとして戸畠地区寺院、檀信徒がおよそ百名、玄題旗を押し立て、法鼓を擊つて待機していた。

直ちに公園より町内市民に向い、マイクを通して街頭説法を展開、立正世界平和団子吼の火ぶたを切る。獅子吼は同時に、布

たせた。

百雷一時に落つるかの如き大音響が、三百名近くの擊鼓より起つた。大行進は玄題旗を陣頭に、新町通り、宝塔寺前商店街を通り、市街をふるわすこと、およそ一時間あまり。

数百メートルにも及ぶ延々たる長蛇の列、擊鼓する三百近くの法鼓は、さすがに威風堂々としており、身延山学生僧が隊列の要所所に分散して、法鼓と歩調を調整すれば、さしもの大行進は一糸も乱れず、行進そのものが偉大なる布教効果を如実にあらわし、心田深く仏種をうえつけられた沿道市民の中には、土下坐せんばかりにして、この大行進を合掌礼拝する者の姿さえ見うけられた。

に限らず、この日、最後の布教都市飯塚市に至るまで、終日いたるところで見うけられたことだった。

## 十九

一行は枝光駅前附近より、待機中のバスに分乗。それより戸畠地区の布教へ向い、戸畠の神台通り電停前より再び行進を開始すれば、中本町、明治町のアーケードの商店街は、反響する法鼓の大音響に、地軸もゆるぐばかり。

商店街は、まだ朝の開店準備中であったが、突如降って湧いたような此の大行進に心も奪われ、仕事も忘れて見まもる人垣には、次々に教箋が配られて行った。布教隊は戸畠の渡場まで行進し、ここで枝光、戸畠地区の植信徒と別れをつけ、バ

スで若戸大橋を渡る。

若戸大橋は、昨年完成したばかりの、歌にも歌われた夢の大橋、幽門海峡を一またきにして若松と戸畠を結んでいる。

眼下に見おろす海峡には、大小の船舶が絵のように浮んでおり、橋の上からは、戸畠の丘陵にそびえる私舍利塔のバゴダが、異国情緒をそえて白く輝いて眺められる。

やがてバスは若松老松町の立宣寺に到着。境内には若松地区植信徒が待機、ひしめいていた。これと合流したバス四台の機動布教隊は、立宣寺前より若松警察官の誘導のもと、中川通り、丸柏デパート前、本町を擊鼓行進し、再び立宣寺前に取つて帰して、バスに分乗、午前十一時三十分、一路折尾へ向った。

迎えの折尾地区檀信徒百数十名と合流、中央本通りに延々たる大行進を展開する中、一時、驟雨に見舞れることがあったが、少しもあわてず、雨をついて堂々と擊鼓。二時三十分、予定通り正賢寺（住職源崎正俊師）に到着。

中食もそこそこに直ちに本堂において、木島所長導師のもと立正世界平和を祈願。つゞいて身延山布教別動隊長日高白象師の講演。檀信徒は、さしも広き本堂、庫裏にも入れ切れず、四台のバスの中に雨をさけていた。

日高隊長の講演は、「人間の祈りの深さ」

ということから始った。それは越後の良寛禅師の逸話にもとづくものだった。

マリをついたり、カクレンボをしたりした無欲恬淡なお坊さん、飄々として洒脱なお坊さんとして、今の世の子供たちにも、絵本やマンガを通して親しまれている。

然し良寛さんは、たゞそれだけの人ではなかった。禅宗のお坊さんではありながらも深く法華經に帰依し、特に法華經の第二十章に説かれている常不輕菩薩の人間像に私淑していた。

常不輕菩薩は、道行くすべての人々を、たゞひたすらに礼拝したのであるが、良寛さんも、その芳触を慕って、次のように歌

著はたゞ万事はいらず常不輕  
菩薩の行を殊勝なりける

たゞ礼拝を行じて、この身を送る

南無帰命 常不輕

天上天下 唯一人

この人以前に、この人なく

この人以後に、この人なし

不輕老 不輕老

我れをして長く淳真を慕わしむ

両親や親戚の人々が、かわるがわる口もす  
っぱくなるほど意見した。然し意見すれば  
するほど、却って馬之助の放蕩は、つるる  
ばかりであった。最早やこのままでは、捕  
家は倒産するほかはなかつた。

それは良寛さんが、長い修行の後、故郷  
の越後に帰つて来て、五合庵という草庵を  
むすんでいた頃のことであつた。

母の安子は、懇意にあまつて、とうとう  
五合庵まで良寛さんを訪ねて行つた。そし  
て、

「馬之助を意見して下さい。馬之助は誰の  
いう縁をもらつた。やがて葵樹という子  
供が生れた。葵樹は別名を馬之助といつた。  
良寛さんは叔父、甥の間柄だった。

ところが、あとゝりの馬之助が、長ずる

に及んで放蕩に身を持ち崩してしまつた。

と泣いて頼んだ。

良寛さんは、安子の願いを、こゝろよく

引きうけた。そして安子にともなわれて、久方ぶりに実家へ帰った。

然し、どうしたことか良寛さんは、一日たち一日たっても、馬之助に対して、一口も意見がましいことは言わなかつた。

いや、意見するというよりも、

△何とかして甥の放蕩がよくなるようにな

と祈りながら、わざわざ出かけて来た良寛さんではあったが、その祈りの心が深ければ深いほど、一言も片言も、意見がましいことすら言えず、馬之助と顔をあわせては、たゞにっこりと、ほゝえみむばかりであつた。

一方、馬之助としては、

△どうとう坊主が、鹿爪らしい説教をして来た

て、たくまさる深い温いほゝえみを受ければ、知らずくの中にも、良寛さんに心ひかれ、親しみさえ覚えて来るのだった。

それまで馬之助の周囲の人々は、両親にしても親戚の人たちにしても、友人や村人にしても、馬之助の顔さえ見れば、口やかましく意見したり、爪はじきして來た。

然し良寛さんだけは、全く異質だった。親しげにほゝえんでくれた。それは微塵も作為的なものでもなかつた。良寛さんの全身には、おおらかな温い人間味が、にじみ出ていた。

放蕩し始めてから一度も人に、ほゝえまれたこともなかつた馬之助は、良寛さんとみれば、我れとはなしに心はやわらぎ、良寛さんとほゝえみをかわすようになつた。

刻、良寛さんは、とうとう一言も意見しな  
いまゝ、急に、

「わしは草庵へ帰ろうと思う」

と言ひ出した。馬之助はびっくりした。  
「叔父さん、もう少し居てもいいじゃあな  
いか」

と、せがんだ。然し良寛さんは、

「いや、わしは帰る」

と、つぶやくや、カマチに腰をおろして

△・・・せめてもの

ワラヂをはき出した。やむなく馬之助が、  
と、ワラヂの紐をむすんでいると、馬之  
助の手の甲に、ボタボタと落ちた熱いもの  
があった。馬之助は驚いて良寛さんの顔を  
みあげた。

良寛さんは、あふれる涙をこらえ、口も  
ともふるわせながら、慈愛のまなざしを、

しばたゝいて、馬之助を、じっと見つめて  
いた。

馬之助はハツと心うたれ、思わず顔を伏  
せた。良寛さんは、やおら身を起し、無言  
のままスッタスッタと立ち去って行つた。

それ以来、馬之助の放蕩がビタリとやん  
だことは言うまでもない。そして生れ変わ  
たように家業に精を出し、かたむいた家を  
建て直して行つた。

人の罪を責める前に、その罪の因果を、  
おのが罪の因果と感じて、まずみずからを  
責め、みずから懺悔して、その人の上に祈  
る慈愛の心。・その深い良寛さんの祈りの  
心が、言葉でなく、ボタボタと落ちた熱い  
涙を通して、馬之助のかたくな心も、太陽  
の光りに照された冰のようにとけて、本然  
の心によみがえさせられたのである。

良寛さんは、今からおよそ百三十年前、

天保二年正月六日、行年七十四才で亡くな

か。

つた。葬儀の行列は延々として火葬場までつづいた。それは草深い越後の片田舎では見られないほど盛大なものであったといふ。

良寛さんは、世道人心を改革しようとした賢者や、宗教界の腐敗、堕落を革新しようとした聖者の群像よりも、みずから「大愚良寛」となることによつて、今日なお多くの人々に親しまれ、多くの人々に人生の光明を与えてゐる。

広く世のため人のために尽そうとする人

ほど、良寛さんが馬之助に対したような深い祈りの心を、まずみずからが持もたねばならないのではないか。特に、法華經を信じて、お題目を唱えている人々にとつては、全くことの出来ない心ではないだろ

か。

日頃の日高隊長の話しぶりは、何時も激烈なほど全身の情熱をかたむけていた。然し、この時はかりは、その情熱も内におさえ、みずからを反省しているが如く、静かな語り方であった。それだけに、これを聞く人々の感銘は深かった。満場あちらこちらに、あふれる涙をぬぐう人々の姿があった。しみ入るようを大いなる感動が、静かに人々の上に、そして人々の心の中に流れ行つた。

時に日高隊長は、声を励まして言った。

「今日、創価学会の跋扈、跳梁は甚しい。これをこのまま放置すれば、仏教の前途のみならず国家前途すら、あやうくなつて来る。

学会を折伏するもの、それは政治でもなければ、他の宗教でもない。真宗でもなければ神宗でもない。たゞ日蓮宗のみが学会を折伏することが出来る。心ある世間の人々も、等しくそれを期待している。

日蓮宗僧俗には、日蓮聖人の正意を開顕宣布するためにも、そして國家累卵のあやうきを救うためにも、今や野火のよう燃えひろがらんとしている学会の炎火をくいため、消しとめる責任があるのだ」

更に言葉をつづけた。

一然し学会員といえども、み仏の子であることには変りはない。就中、同じ日蓮門下の宗団である。

学会折伏に当っては、良寛さんが馬之助にそゝいだような、深い祈り心をもつてなければならない。この心によつて学会の

人々も、馬之助のように本心によみがえて来ることが出来るであらう。

良寛さん的心、それはそのまま本仏釈尊の毎自悲願の心に近じ、日蓮聖人のへ鳥と蟲とは鳴けども涙おちず、日蓮泣かねども涙ひまなし」という心に通うものである」と結んだのである。

## 二十一

さて講演終了後、直ちに機動布教隊およそ二百数十名は、龍潛寺の伝道方に、四台のバス、自家用車に分乗、正賢寺前附近より車をつらね、遠翼川ぞいに長驅して、今度は直方市の布教へ向った。

沿道の左右には、筑豊炭田特有のボタ山が点在しており、炭坑の坑道落盤のため、地表沈下して出来た沼地が、隨所に散見された。

バスの車掌が風景をガイドしていたが、身延の学生僧にとっては、見るもの、聞くものゝ皆珍らしいものばかり。

午後二時、直方市羽衣町長遠寺に到着。住職栗原正隆師をはじめ地区檀信徒に出迎えられ、栗原師導師のもと直ちに立正世界平和祈願法要を厳修。ついで栗原師を陣頭に、市中鑼鼓大行進に移った。

丁度この日は日曜日、殿町、古町のアーケード商店街は、お祭のような群衆の波。その真只中に、群衆をかき分けかき分け、堂々と行進。日蓮宗の威風を遺憾なく発揚。

午後三時三十分、郊外の觀音寺（住職大塚義師）に到って初めて小憩。これより再びバスで飯坂市へ向った。

「あの赤土地帯の方々が、開発した県立公園上野原、それよりずっと上の方に、私がお題目をほりこんだ滝がある」

「ああ」という説明があった時、隊員の中にどよめくような感動が流れた。

「ああ」というのは、日高隊長が立正大学時代、それは十八出家した翌年の夏休みのことだったが、故郷の恩に報ゆべく、且つは郷土の立正安國を祈って二十一日間、今、指さず富甲山を廻、原始林の中の滝を見たが、

その岩壁に、高さ二メートル近くの岩題目

内中央大通りを行進。

をほりこんだという。そしてその後、再びこの滝にこもって、本仏信仰の核心にふれることが出来たといつ修行体験談を、かねがね聞き知っていたからである。

隊員が、こうしたいわれの福知山を、感激深く眺める中、バスは一路、川ぞいの県道を、飯塚市へと走っていた。

## 二十二

一行が飯塚駅前広場についたのは午後の四時、折から広場には日曜行楽の団体が二百名ばかり、列車を待つて蝶集していた。早速この群衆に向って立正世界平和、創価学会折伏を獅子吼。

この間、現地参加の極信徒と合流。これより飯塚警察署より出動した白バイ数台の先導で、飯塚駅より新飯塚駅へ貫通する市

行進は車道右側一列縱隊、三百名をこむる延々たる長蛇は壯觀そのもの、その中に龍王寺福山法尼をはじめ婦人の徒弟十数名が、一様にエンヂの居士衣に木枷の袈裟、手甲脚絆にワラジがけという、凜々しい尼僧姿が人目をひいた。

白バイは行進前方に駐車している自家用車、トラック、オートバイまでも次々に移動させ、交叉点でもノンストップで行進に協力。

新飯塚駅前を通過する頃、夕闇が迫り、龍王寺の立岩町へ入った頃は、既に灯が町にともっていた。

後で知ったことだが、立岩の町は、日高

昼すぎ故郷の山河をまのあたりに見、そして今まで、母の里に到って隊員と共に、こゝに布教せんとする日高隊長の感動は、如何ばかりであったことだらう。

寺の栗原師、木島宗務所長、龍王寺福山法尼の挨拶あつて日高隊長の講話。

その内容は、およそ次の如くであった。

まして今度の布教は、計らずも日高隊長にとつては十三年ぶりの帰省であり、身延山布教別動隊の学生僧を従え、故郷の寺院檀信徒の全面的協力を得て、華々しく街頭布教を展開することの出来たその胸中は、ハ故郷に錦をかざるゝというよりも、十三年ぶりにハ故郷の恩に報ゆることが出来た。といふ感激で一杯であったことだらう。

お題目の種も、またかくの如くである。種は本仏の種、最高のものを選ばなければならぬ。そしてこの一粒のお題目の種を大切にし、自分自身の心田に、また人々の心田にうえつけ、そだて如何なる苦難にも堪えて行く時、苦難がそのまま堆肥とな

院。戦後に建立された新寺であった。

布教隊は龍王寺に到着するや、直ちに本

親から子へ、子から孫へと、一粒の信心の種がつたわる時、家庭の中だけでも、縱に五十展転隨喜の功德が現成する。

広宣流布を願うならば、まず家庭の信仰

を確立せよ。それには自分自身が只今たもつてゐる信心の種を、最高の本仏の種と選び、その種を大切にすることだ。如何なる苦難に堪えて守り抜くことだ。あせってはならない。必ず時が来る。冬の次は芽ばえの春、春の次は育ちの夏、夏の次は実のり秋、時は待つべきのみである。

但し、一粒の種を取りあやまれば、その業報も五十展転して行く。創価学会がまさしくそれである。

蓋し日蓮聖人も仰せられた。

「惡は多けれど一善に勝つことをなし」

と。中天に輝く星座は多けれども、十を

び太陽の光があらわるれば、衆星ために光りを失う。我々の信仰は、たとえ一粒のものであつても、あたかも一つの太陽の如くあらねばならない。

人間の組織に幻惑されではならない。あやまつた教えたによる組織は、たとえ一時強大であつても、時代と共に消えて行く。

消えざる久遠の光り、それは信ずる者を通して放なたれる本仏釈尊の光明、たゞそれが一つである。

夕刻七時より書院において懇親の晩餐会福山法尼は布教隊員福山忠司君（身延山大学二年）の師僧に当つており、また福山君の家族も列席していて、隊員一同、友人の寺に来た心安さにくつろぎ、なごやかな一時を過した。

夜九時すぎ閉会。栗原師、木島所長等々

の寺院各聖は、

「明日は博多であります」

と、それぞれ自坊へ帰って行つた。

その後、福山法尼を閉んで座談会を開催

法尼の信仰体験談に耳をかたむけ、就寝したのは十一時すぎ。疲労困憊した隊員は、泥のような眠りにおちた。

## 二十三

翌くれば布教三日目、朝未明の四時、本堂の外で多くの信徒が次々に、子供までまじえて熱心に、お百度をふむ唱題の声に目をさます。

聞けば龍王寺では、夜明け前にお百度を

薄墨を流した日本画のように眺められた。

バスが東公園の銅像前に到着したのは朝八時。困難に祈る日蓮聖人の大銅像は、右手に大数珠、左手に立正安國論の一巻を持ち、折からの旭日に照り輝いて、白空に威圧するが如くそびえていた。

この大銅像は、九州の本仏寺佐野前勵上

する所以の一端をのぞく思いをした。

さて、この日は博多東公園の日蓮聖人大銅像を基点とする福岡市中の街頭布教。朝六時三十分、別動隊と龍王寺檀信徒百数十名は、二台の貸切バスに分乗、八木山峠を越えて東公園に向つた。

峠にさしかかる頃、夜が明け

遠く見おろす雲海の中に、筑豊炭田のボタ山の群が、

人間が発願し、同志と共に全国に勧進布教して完成しを東洋第一の大銅像。

発起したのは明治二十一年、建設発会式は明治二十三年十一月、起工式は明治二十五年四月。顔と木型は彫刻界の巨匠竹内久一氏が作製。首、両手、巻物は鍛金界の重鎮岡崎雪声氏が担当。他是岡崎氏監修のもと明治三十四年より三十七年にかけて、四ヶ年間十七回に分けて铸造され、十数年の歳月と苦斗のあかつき、明治三十七年十一月八日完成除幕されたもの。

銅像の身長

重量

台座の高さ

地上全長

銅像の頭の丈

耳の長さ

口の幅

首廻り

一丈四尺二寸

海峽を通るか、津軽海峽を通るか、杳とし

銅像の袖の長さ 一丈三尺五寸

裾の廻り 五寛七尺

立正安國論の軸丈 六尺四寸

数珠の長さ 七尺二寸

なお、この銅像建設中、次のような奇蹟が起つてゐる。それは明治三十七年の日露戦争中、まさに日本海大海戦が火ぶたを切らうとする直前、そして銃後では日露聖人の銅像が、東公園に完成しようとする少し前のことであつた。

連合艦隊司令長官東郷大将は、日本海上、旗艦三笠の艦橋にあって、バルナック艦隊を要撃しようと待機していた。

然し、ウラジオストックへ向うバルナック艦隊が、日本海へ入るのに、果して対馬

て探知される事もなかつた。

若し敵艦隊を、このいずれかの海峡におへて捕捉し撃滅しなければ、大戦の戦略上、致命的誤差を生じた。

連合艦隊主腦部は、要撃艦隊を対馬海峡へ廻すか、津軽海峡へ廻すか、刻々に迫つて来る乾坤一擲の海戦を目前にしながら、その岐路に迷っていた。裁断は、沈黙を守る東郷長官の一言にあつた。

この時、東郷大将の双眼鏡に映じた一大巨像があつた。巨像は、対馬の方向、果しながら日本海の水平線上に屹立していた。幻覚ではなかつた。そばにいた加藤參謀長も双眼鏡でこれを見た。それは除幕前の、日蓮聖人の大銅像であつた。

国難に生涯を捧げた日蓮聖人の英姿、これまで獲得した東郷大将の土は決つき。

#### △敵艦隊は対馬海峡から来る

そして、これを要撃々減せんとする必勝の確信は東郷長官の全身にみなぎつて行った。

果してバルナツク艦隊は対馬海峡へ向つた。五月二十七日午前四時四十五分、索敵船信濃丸から「敵艦見ゆ」の無電が発せられた。

海戦は、あまりにも一方的であった。連合艦隊は世界海戦史上、今次世界大戦を通算に入れても、空前絶後の大戦果をあげた。東郷大将は、凱旋するやいなや、まず博多湾より上陸し、既に完成し除幕されていった日蓮聖人の大銅像に参拝した。それは参拝せざるを得ない現証を得たからであった。そして当時の「洋上の奇端」を、佐野前励上人て報告し、後田、戰利品の艦砲一門を

贈った。

その大砲には「皇威輝八絃」という大金

文字が刻み込まれていたが、費用の全額は大将の私費によつて支弁された。

後日、大将はみずから法華經に帰依して「立正」の勅額奉戴にも尽力し、没後、遺言により多摩府中の私邸をあげて寺とした。これが今の大覺寺であるが、こうした仏事は、実は日本海々戦直前における「洋上の奇端」に、その端を発していたのである。

## 二十四

さて布教隊は、この銅像前で福岡市内外の寺院檀信徒、飯塚龍王寺の檀信徒、並に門司、小倉よりも近せ参じた人々と合流。隊列を整えて午前九時、いよいよ博多市中の街頭布教を展開せんとするに当つて、市内妙典寺本田日秀師の導師のもと、自我俱

一巻をあげて法味を言上。

つづいて本田師、木島所長の挨拶あって日高隊長は、感動に声もふるわせながら、「身延山学生僧は布教別動隊として身延山からはるばる九州まで西下し、間司、小倉八幡の街頭布教から三日目、本朝、日蓮聖人の大銅像前に立つことが出来た。

そして只今、本田僧正の導師によつて法味を言上したが、私は本田僧正の此の姿に接した時、今から二十年前、私が立正大学の学生時代、夏休みを利用して、大学の夏期布教隊の一員として九州を巡回、直方の長遠寺栗原僧正の斡旋で、市の公会堂で講演した後、博多へ入り、本田僧正の斡旋によつて朝日新聞社の講堂で、立正安國運動の動向に関して講演したこと思い起し、感概無量である。

二十年前の昔と今、時こそ変れ、人も所  
も變っていない。そして説く教えも變って  
いない。

仏陀の説法は「三世説法の儀式」と曰蓮  
聖人も仰せられた。私は今、この言葉の意  
味をつくづくと味わう。仏陀の説法は、万  
世に変ることなきたゞ一つのもの、それは  
法華經である。

過去、無量無辺の如来や如来の使いによ  
つて、この一つの法華經が、繰り返し、繰  
り返し、同じように説きあかされて來た。

未來もまた永遠に変ることなく、説きくり  
返えされて行くであらう。

そして私たちもまた、本日只今より、如  
來の使いとなつて、如來の正法を説きくり  
返えそうとしざいる。

その場そのまま即は道場であり、本仏果海  
中の大マンダラ法界といふ。

されば今より街頭布教を開しようとす  
る博多全城を、今日一日、大マンダラの淨  
土と昇華せしめたい」

と挨拶。これより街頭布教のため叢集し  
た大集団は、福岡県日蓮宗青年僧によつて  
結成されている伝道隊の誘導のもと、銅像  
を起点として二流の玄題旗をひるがえしな  
がら、東公園の中央を横切り、博多の目抜  
通りとへと向つた。

舉鼓はビル街にこだました。教箋は次々  
に配られて行つた。千代町、東中洲を経て  
天神町へ到り、岩田屋デパート前の交叉点  
において街頭説法を始めるや、各社の新聞  
記者がカメラの砲列をしき、西日本テレビ

やがて県庁前、川端通り、大学通りを経三時間に亘る大行進の後、銅像前に帰着した時は、既に正午をすきていた。

## 二十五

中食後、別動隊員は初めて小憩を得、その間、日高隊長と共に銅像事務所の主管藤山英輔老師に挨拶したが、老師は既に八十の坂をこえ、昭和二十五年四月以来、銅像を護持すること十五年、さすがに体も衰弱しているかのようだった。

挨拶中、老師と隊長は、あたかも幾年ぶりかに対面した父子のように、互に溢れる涙をおさえながら久闇を叙していた。

講師は日高隊長と大場副隊長。つまづけた溝場の檀信徒の中には、隣りの佐賀県の片田舎から、朝まだ暗い中、一人で駆けつけて来た隊長の長女陽子ちゃんも、四つの時、東京開教に旅立った父なる隊長と別れ以来、早くも中学二年生に成長し、終始

隊長の悲愁、これがやがて老師と隊長の間に父子の情をかもして行った。  
然し隊長は、東京開教を志して九州をたった。そして今度十三年ぶり、老師と対面したのである。旧懐の情、禁じ得ないものがあつたことだろう。

さて午後二時より銅像記念館において本田秀師導師となり、市内の修法師が出仕して、立正世界平和の国際会を厳修。ついで創価学会批判講演会が開催された。

問けば、老師の令息英教師は、隊長の大學生時代の恩師であり、さながら兄弟のような仲であったといふ。所が英教師が、今次大戦中、ビルマで戦死した。老師の悲嘆、熱心に講演を聽いていた。

初めて見る父の墨染の衣姿、初めて聴く

父の言々火を吐く獅子吼、十三年間、瞼に  
えがいた父をまのあたりにした陽子ちゃん  
の胸中、如何ばかりであったことだろう。

また、そうした我が子を目の前にしなが  
ら、講演をつゝける隊長の、心の中は如何  
ばかりであったことだろう。

「こうした出家とその子」の場面を目撃す  
るにつけ、学生僧としても胸も痛むほど反  
省せしめられたことは、布教に生くべきか、  
家庭に生くべきか、そのいずれを主とすべ  
きかであるかという、僧道の厳しさであっ  
た。

がら、

「日蓮宗と創価学会は、同じ日蓮聖人の流  
れをくんでおりながら、互に邪教よばりじ  
てゐるが、これは第三者の立場にある世間  
の人々からへきりのない水かけ論である。」  
とか、或は「滑稽な同志討ち等と、嘲わ  
れはしないか」

という質問が發せられた。この時、隊長  
は言下だ、

「本講演会の趣旨は、一方的に創価学会を  
批判攻撃するのではなく、学会のあやまり  
を批判しつゝ、日蓮宗で護持すべき日蓮聖  
人の正意を再確認し、これを宣揚せんとす  
るものである。

講演会は前後三時間に亘り、本尊、題目  
戒壇の三大秘法を中心として、日蓮宗と創  
価学会との対比批判がされたが、その後、

但し創価学会が、釈尊を脱仏とうそぶく  
こと、大聖人の御真骨を馬の骨と呼び、身

冥合はまだしも、富士の大石寺に本門の戒壇を建立すると曲説すること、この三点の妄説は、断呼として許すことは出来ない。たとえ学会でなくとも、かゝる妄説は徹底的に破折しなければならない。

これをおろそかにして、どうして自分自身の信仰における謗法懺悔ということが出来よう。」

と解答、万雷の拍手を欲びた。

講演会は、盛んあがる熱気の中、予定期間の過ぎるのを惜みつつ閉会。その後、書院大広間において藤田恵久氏、田舎鹿雄氏、上田恵三郎氏、飯岡義岡氏、等々の福岡県身延山本願人会の招待による、寺院各聖をかこんだ晩餐会にのぞみ、懇談かわしながら博多名物の水タキに舌すつみを打つ。

舞散後、藤山老師の令息英雄師、市内本

岳寺立野良覚師等をかこんで座談会。藤山が本化の祈禱に及んだ時、藤山英雄師より、「一口に如来秘密神通之力と言われているが、この神通力とは、あくまでも如来自身のものであって、凡夫の業通力とは、全く次元を異にしている。

この両者は、往々にして混同されているから注意しなければならない。惡心に久遠の本仏教尊を仰ぐ所、如來の神通力は、おのずから現証としてあらわれて来る。これを本化の祈禱という。決して業通力に依らずにはならない。」

と注意があり、また宗門布教の在り方については、

「所詮、宗門僧侶の一人一人の自覺と実践にまつほかはない」

るもの知らず続けられた。その夜、別動隊は書院大広間で枕をならべたが、日蓮聖人大銅像の膝下に眠る身の幸せを思わずにはおられなかつた。

## 二十六

翌くれば布教四日目、朝八時、藤山老師をはじめ銅像事務所関係者、身延山本願人会等々多数の人々と別れを惜みながら、銅像前より貸切バスで、この日の日程に従い甘木、吉井、久留米の布教へ向つた。先導は県下の日蓮宗伝道青年会員。

早朝の博多市街を通り抜け、一路国道を南下、元冠の古戦場水城の堤防を眺めながら、日本武尊命が太刀を洗つたといふ太刀洗、戦時中まで飛行場であった所を過ぎ、

甘木の妙照寺についたのは九時。

らした本堂正面には、手甲脚絆に身をかためた住職湯川泰瑞師をはじめ檀信徒は、既に擊鼓待機しており、これと合流して直ちに市中街頭行進を展開。繁華街の中央で獅子吼三十分。十一時、妙照寺に帰着すれば、久留米より火急の連絡あり。

「本日午後一時より本泰寺にて国禱会がいと生まれるので、その際、日高隊長に是非一席の講演をしてもらいたい」

という。久留米の本泰寺は、別動隊員鶴沢剛夫君のお寺、また日高隊長にとっては、曾て大学の夏期布教の折、世話をなつた所。

そこで隊長は、隊員二名をつれ、別動隊とは久留米駅前で合流することを約し、電車で久留米へ直行。本隊は大場副隊長指揮

本仏寺は「鎮西身延」とも称せられ、日蓮聖人の御分骨が安置されている靈場である。正十二時、山門に到着。住職佐野前光師をはじめ多数の檀信徒に出迎えられ、本堂、御真骨堂にて法味言上。中食の供養をうけた。

ちなみに佐野前光師は、博多東公園の日蓮聖人の銅像を建立した佐野前勵上人の令息であり、筑峰会学生にとっては、一昨年の夏休み第一次別動隊として身延から布教行脚して東京にたどりついた時、宗務院で歓待激励してくれた当時の庶務部長。今、

第五次別動隊として九州まで来て再会すれば、當時を思い起して感激一人のものがあつた。

さて午後一時より佐野師を陣頭に、ウナギの寝床のように細長い吉井の町を、延々

として擊鼓唱題の行進を展開したが、聞けば本仏寺では、始終街頭布教を行い、時の淨財は社会福祉事業に寄進しているという。

このため伝道カーも布教専用のもの。その車体には「但行礼拝」の四文字を大書した幔幕が張りめぐらされていて、總本山身延の布教隊と、鎮西身延の布教隊と一緒に走った街頭擊鼓は、

「人間礼拝に徹することこそ信仰実践の極地である」

といふ教諭と共に、町民に深い感銘を与えたにはおかなかつた。

午後二時四十分、吉井地区の布教を終り、佐野師をはじめ本仏寺檀信徒の唱題に見送られながら、別動隊はバスで久留米とへ急いだがここで別動隊員を感動せしめた一人の人に出あつたことを、特筆大書しておか

ねはならない。

その人というのは、本仏寺のお弟子さん

のことであった。この青年僧は、もと比叡

山で修行していた天台宗の僧侶であった。

ところが昨年の正月、冬休みを利用して

身延山の第二次布教別動隊の学生僧が十数

名、京都、奈良の街頭布教を展開するに際

して、まず日蓮聖人が青年時代、遊学研鑽

された笠地比叡山の横川常光院へ擊鼓登詣

する姿に接して、深く心うたれるものがあ

つた。

一行は根本中堂の堂内に端座し、大音声

に法華經を読誦、堂塔ゆるぐばかりに擊鼓

して、日蓮聖人の報恩鈔の一節、

日蓮が慈悲曠大なれば

万年のか未來までも流布すべし  
日本國の一切衆生の

盲目を闇ける功德あり

無限地獄の道をふさぎぬ

この功德は伝教、天台にも越え

龍樹、迦葉にも勝れたり

極樂百年の修行は

穢土一日の功德に及ばず

正像二千年の修行は

末法の一時に劣るか

これひとえに

日蓮が智の賢きにあらず

時のしからしむるのみ

と奉唱。受付けに教義若干を置き、再び

雪をふみしめ、吹雪をついて、横川の常光

院と下って行つた。

残された教義には、「人間礼拝・・・」と

いう一句と、

祈りなき平和はあり得ない

敵をもいつくしむ心を深めよ

永遠の光りは、その祈りより生ず

という一句が、したゝめられていた。やがて、かの天台の青年僧は叡山を下った。

そして縁あって、九州の本仏寺まで至り、佐野前光師の弟子となつて、修行を重ねていたのである。

第二次別動隊は、叡山において説法の一つでもしたわけではない。またその青年僧と言葉をかわしたわけでもなかつた。

然し、これを契機として改宗した青年僧にめぐりあつた時、今さらながら擊鼓宣令の尊さに、思いを深くせずにはおられなかつた。

さて吉井の町を後にした大場副隊長以下別動隊の一方が、国鉄久留米駅前広場に到着したのは午後の四時。待機中の木島所長をはじめ久留米寺院各室、並に檀信衡、本泰寺の講演をすませた日高隊長等の一行と合流。直ちに布教開始。

駅頭第一声は、激烈火をはくような日高隊長の獅子吼（その内容は、布教初日の小倉駅頭のそれと重複するので、こゝでは割愛する）次いで延々たる擊鼓大行進は、伝道青年会の先導により、繁華街をふるわせて西鉄久留米駅へと向つた。

西鉄駅前広場に到着した頃、既に夕闇が迫り、人も車もラッシュに入る。学生隊員は、これを好機とばかり、互にマイクを奮いあいながら、すっかり板についた弁舌で立正安國を雄叫ぶ。

これより更に行進を起し、東町、寺町を

通って幕末の動王の烈士、高山彦九郎の墓に詣で、自我偈一巻を回向した。

高山彦九郎は京都三条の大橋から、衰微した皇居を伏しおがんだことで有名となり今日、三条大橋には彦九郎の銅像が建てられているほどであるが、生前熱烈な法華經の信奉者であったといふ。

午後六時、その日の宿泊所である寺町の

妙正寺についた時、日はとつぶり暮れていた。住職田中潮栄師はじめ本泰寺輪沢泰温師、妙善寺津田弁祐師、伝道青年会の方々、並に総代世人の方々による歓迎晩餐会に臨んだが、さすがの学生隊も、早朝よ

り夜おそくまで、ぶっ通しの衝頭布教四日もつゞき御馳走を目の前にしながら、疲労

後、倒れるように寝についた。

なお本仏寺の伝道カーは、布教最終地点の熊本まで借用させてもらうよう、佐野師に連絡。快諾うけて運転手も一緒に宿泊、今後、行動を共にすることになった。

## 二十八

翌ければ布教五日目、八女、筑後、大川柳川、灘高、大牟田を布教して熊本の本妙寺へ入る日程である。

朝八時、妙正寺の田中師、伝道隊青年僧の方々と共に、身延山本願人井上薰太郎氏（八女市本興寺の檀徒）提供の貸切バスに乗り、伝道カーに先導され、八女市福島へ向った。

バスには井上氏夫人と共に、孫である三才の理香子ちゃんも同乗しており、大牟田

生も思わず勇氣百倍。

聞けば八女市の福島町は、久留米を中心とした此の地方一円における創価学会の発祥地。

新たな斗志はリンリンと湧き、街の入口より鼙鼓行進して、特に学会地区幹部の家の前にマイクをすえつけ、身の毛もよだつほど苛烈に学会を折伏。（その内容は、布教初日、北九州八幡における説法と重複するむきもあるため、こゝでは割愛する）

情報では、学会としても、既に前夜より地区の幹部が全員、その家に集結していたといふ。

恐らく街頭布教に対する対策のためであつたろうが、予想以上の鼙鼓と獅子吼にのまれてか、姿さえ見せず、何の反撃も起らなかつた。蓋し、学会としては、そうする

ことが最上の対策でもあつたのだろう。  
次は筑後市の羽大塚、ここでも此の日、町の公民館で学会の昇級試験があつてゐるという。

学校の横でバスを降り、それより商店街を通って羽大塚駅まで市中行進。駅前広場では再び学会に対する折伏説法。学生も舌頭火を吐く気鋒で熱弁を展開。

大川市へ入ったのは午前十時四十分。行進と説法を繰り返しながら常清寺（住職荒善良温師）に参拝。こゝで小憩中、大牟田より連絡あり、

「法華寺と南正寺へ、それぞれ二人ぐらい隊員を派遣し、檀信徒のために講話をしてもらいたい」

という。そこで早速、大場副隊長と学生宮下君は法華寺へ、布教研修生の高田君と

学生深沢君は南正寺へ、それぞれ大平田へ先行。本隊は予定通り、常清寺から更に行進を起し、繁華街のつきた所からバスに乗り、柳河へ向った。

柳河は北原白秋の生れた水郷で名高い所市内神社の前から行進を開始、西魚屋町の台照院（住職宮崎隆道師）に到って中食。

一服する間もなく、今度は瀬高へ向った。

瀬高の町の入口でバスを降りた時、本長寺住職野口耀源師の要請で、寺に参集している極信徒に講話するため、清水布教部員が本長寺へ先行。

別動隊は四班に分散布教することとなつたが、土気ますます旺盛。街頭説法しつゝまず本淨寺（住職徳永前貞師）に参拝、本長寺で清水部員と合流、次の尊寿寺（住職

小憩中、参集の檀信徒に布教。更に郊外まで行進し、瀬高の町をお題目一色にぬりつぶして午後二時十分、一路大平田へ向った。

なお、この布教を機縁として、本淨寺の令嬢徳永和子さん姉妹が、三月の身延山青年行学講習会に、わざわざ九州から参加されたことを附記する。

## 二十九

さて大平田市鳥塚町の南正寺に到着したのは午後二時四十分。市内寺院檀信徒は続動員され、本堂、庫裏は立錐の余地もなく群衆は境内から参道までも溢れ、既に先行していた大場副隊長以下四名の説法によつて、檀信徒の歓喜は高調し、ムンムンする熱氣は、あたり一杯充満していた。

直ちに住職半田口義興師が導師となり、

それは昨年十一月九日、大牟田三井三川炭坑内における炭塵爆発によつて殉職した四百五十八名の靈に捧げる法要であつた。

法要中、遺族代表の焼香があり、つよい

てなされた挨拶の中、次のような言葉があつた。

「この氣の毒な殉職者の中に、二十名ばかり創価学会の会員がまじっていました。所

が創価学会では△彼等は信仰が足らなかつたから死んだのだ」といっているのです」

まだ記憶も生きしい昨年の暮十一月九日三井三川坑内における炭塵爆発によつて殉職した、痛ましき四百五十八柱の精靈に対する、追善慰靈の供養であつた。

布教隊が大牟田まで來た目的の第一は、實に、この慰靈供養のためであり、慰靈供養のためにこそ、はるばる身延山からやつて來たのである。

事故発生以来、これまで多くの人々や団體によつて數多く慰靈供養がいとなまれたことであろう。然し、靈を慰め、供養するのに、慰めすぎるということはない。供養

しすぎるといふこともない。

われわれ身延山学生布教隊が、休暇まで

返上し、はるばる身延山から九州街頭布教に来て五日目、大牟田に入つて、まず第一に行つたことは、説教でもなければ講演で

もない。

聞けば、殉職した五百四十八柱の中には  
およそ二十名ばかりの創価学会員がいたと  
いう。然し我々は、たとえ彼等が、如何に  
日蓮宗を悪口し、身延山を誹謗していくても  
決して彼等を憎まない。むしろ、そうした  
彼等の無知をあわれむ。

まして彼等が、日蓮聖人の正意も知らず

だ」

みずから無知の所業を反省懺悔するに至  
らないまま、痛ましい殉職をしてしまった  
とあっては、あわれむ心は更に深い。そ  
して、その深きあわれみの中に、彼等をし  
て改悔せしむる機会を、その生前にもつこ  
との出来なかつたことを我々自身反省する  
ばかりである。

要をいとなんだ。そして引き続ぎ街頭布教  
をおよそ二十名ばかりの創価学会員がいたと  
いう。然し我々は、たとえ彼等が、如何に

それを展開している。  
ところが、こゝに轍るべきことを聞いた。  
それは四百五十八名の中にいた、創価学会  
の会員二十名ばかりの殉難死者に対して、  
「あれは信仰が足らなかつたから死んだの

と学会自身が、批難しているということ  
である。これは学会員でなかつた他の四百  
三十余名の殉職者に対しても、  
「あれは学会の信仰をしなかつたから死ん  
だのだ」と批難していることと同じではないか。

「死者を鞭うつ」

我々は大平田に到着するやいなや、鳥坂  
町の南正寺において、市内の日蓮宗寺院  
を走らせて、心からなる想を共鳴させて去

といふ言葉があるが、学会の暴言は、主  
としてそれである。如何なる悪人でも、憎

が人の道である。

然るに学会が、いやしくも痛ましき多くの殉職者に対して、しかも同じ学会員であった者に対して、あわれむどころか、却つて冷酷な批難の鞭を加えていることは、人道にそむくも甚しい。

曾ってナチスドイツは、第二次世界大戦中に、数百万のユダヤ人を虐殺した。創価学会は戦後、千数百万の先祖の位牌を焼き払った。そして今まで大牟田の地にあっては魂の靈に対するかゝる鬼畜の如き暴言を弄している。

大衆よ、この事実を直視せよ。それはそのまま学会が、ナチの霸道にも等しき宗教であることを、如実に立証している以外なものでもない。

三川坑殉難五百四十八柱の靈よ、安らか

に眠れ。たとえ学会が如何に死者に數うつとも、日蓮宗は更に回向供養をつゞけて行くであろう。そして学会の人々が、一日も早く本来の、まことの道にめざめるよう、努力して行くであらう。

日高隊長の激しい怒りと厳しい祈りをこめた獅子吼は、文字通り腹をし榨るよう絶叫であった。顔面ふき出す汗は、滝のように流れ、マイクも汗にしたくなっていた。これより再び滔々たる鼙鼓大行進が起り、午後四時、大牟田駅前広場に到着。別動隊は直ちに四時二十分発の列車に乗り込み、本仏寺より借用した伝道カーは熊本へ先行した。

プラットホームでは、久留米より終日行動を共にした田中潮榮師をはじめ寺院各聖

檀信徒、そして三才の理香子ちゃんまでも

ときわ印象的だった。

大音声に擊鼓唱題をもつて見送っていた。発車のベルがなるや、終日布教の労苦を共にした感動が高まり、思わず涙をぬぐう者もいた。列車は静かにすべり出した。

### 三 十

間もなく日はとっぷり暮れた。思えば九州布教初日早朝、門司駅で列車を降りて以来、大牟田に来るまで、都市から都市へバスを乗りつき、五日ぶりに乗った列車であった。

これより隊列を整え、加藤清正公の本廟である本妙寺へ向った。擊鼓はネオンに輝く市街にこだました。それは九州布教中、たゞ一度の夜間行進であった。

午後六時、本妙寺本堂前に到着。太田黒所長、日高隊長の挨拶があり、明日の市中大行進を期して解散。学生隊は書院で夕食と入浴。日高隊長と大場副隊長は、貢首池上義豊師に挨拶、宗務所役員、塔中各聖と会食。明日の布教準備を整え、就寝したのは十一時。

福岡県との県境を越え、上熊本駅についたのは午後五時三十二分。改札口一帯には太田黒宗務所長、山田布教師会長をはじめ百余の檀信徒が擊鼓して出迎えていた。その中、水月寺の住職片岡妙澄法尼以下檀信徒の黒装束姿が、白一色の群衆の中に、ひ

なお就寝前、学生隊に対して日高隊長の次のような懐旧談があった。それは隊長が今より二十五年前、在家から仏門に投じようなどとは、夢にも思わない中学生の頃の

ことだった。

夏休みを利用して、福岡県の実家から、熊本の本妙寺まで、往復とも一切車に乘らず歩き通して、単身九州の靈場参拝を始めた。

そのコースは、奇しくも今度、別動隊が布教通過した行程と、全く同一のものであった。

直方の近くの実家から、飯塚の立岩、八木山峠をこえて博多の東公園、水城、甘木を経て吉井の本仏寺、久留米、柳川、灘高大牟田、そして西南戦争の田原坂を越て熊本の本妙寺については、雨のそ降る夜だった。

お寺にとめてもらう方法も知らず、殆ど野宿に野宿を重ね、本妙寺についても山門ひれ伏し、実家の方を拝して号泣したといふ下にだすむほかすべもなかつた。

夜もふける頃、山門の横の茶店の老婆が事情を尋ね、一夜の宿を提供しようとした。

人の情けが身にしみた。感謝のあまり疊の上、布団の中に寝ることすら畏れ多しと、歎きを借りた。

老婆は敷布団一枚を与えた。

懐中には、わずか五十銭、米は一にぎりしかなかつた。翌朝、本妙寺をあとに菊池鯛尾、日田、英彦山と実家への最短距離を走どつた。それは厳しい山道だった。

銭も米も尽きはて、山中ようやく見つけた農家でも、食べものを乞う術すら知らず幾日も水腹をかかえて歩き通し、羽黒山と並び称せられた修驗道の靈山、英彦の嶮を越えて故郷の土をふんだ時、思わず大地に然し、それより二十五年の歳月を経た今

日、再び同じコシスを、今度は身延山別動隊を従え、各地の寺院檀信徒の絶大な協力を仰ぎながら、堂々たる街頭布教を展開し、本妙寺では池上貫首の温い歓待をうけ、食事を共にし、宿泊も書院にてがえられた。往時を回想して今日あるを思えば、隊長としては、学生隊に語らずにおられない無量の感慨があつたことだろう。

### 三十一

翌くれば布教六日目、朝八時より、清正公のお墓の安置されている淨池廟前の舞殿において、太田黒所長導師のもと立正世界平和祈願会を嚴修。

次いで宗会議員羽柴玄快師の案内で、淨池廟を開扉参拝。清正公の尊像を拝し、その遺徳を拝聴。

に見おろす裏山へ登り、山頂にそびえる清正公の銅像を拝観。  
定刻の午前九時、布教隊は參集の寺院檀信徒と隊列を整え、山田布教師会長の誘導で淨池廟前を出発。山門前で獅子吼第一声を放った。その内容は左の通り。

熊本の城主、加藤清正公は、慶長十六年六月二十四日、逝去された。行年わずか五十才であった。

ところが清正公逝去のあとを追って殉死した者がいた。それは日本人ではなく、朝鮮征伐の時、日本へつれて来られた捕虜の中の一人、金官という朝鮮人であった。古今東西の歴史の中、戦争で捕虜となつた者が、今までの敵将に仕えるようになり更に忠誠を誓うに至つたといふ話には、探

せば無いことではなかった。

然し、捕虜にして敵国の領主の死に殉じたということは、朝鮮人金官以外、寡間にして未だその例を知らない。たとえ、これに類する者があつたとしても、恐らく稀なことであろう。

また本妙寺第三世となつた日遙上人は、もと日真上人の弟子として修行していたのであるが、実は金官と同様、朝鮮征伐の時、日本へつれて来られた朝鮮捕虜の一人であった。

金官は死に殉じ、日遙は一国の領主の墓所である本妙寺の貫首となつた。ところがこの二人とも異民族の、しかも捕虜であつたということは、まさしく驚異的出来事といふほかない。

蓋し、これもひとえに清正公の、偉大な

人徳によるものであった。そしてその人徳は、清正公が日夜熱烈に信奉した法華經によるものであった。

今日の世界は、民族問題、人種の偏見差別、等々の問題に紛糾しつゝけている。今こそ世界は、金官、日遙に学び、この二人を感化した清正公の人格、並に清正公の人格を形成せしめた法華經に道を求めねばならない。

かくして国境をこえ、民族、人種をこえ一切の差別対立をもこえた人類の平和世界が招來されるであろう。

布教隊員は、次々にマイクをとつて街頭に叫んだ。斗魂ますます燃え沸った。それは此の日が、今回の九州布教中、最終回の街頭布教となつていたためでもあつた。

## 三十二

いよいよ最後の街頭大行進が起つた。伝道カラは本隊の前方およそ百メートルの間隔をたもちらながら、マイクで日蓮宗、身延山を宣伝。二流の玄団旗をひるがえす本隊では、これも二台の携帯マイクで擊鼓にあわせて唱題。隊列は延々とつゞいた。

花園町より段町、職人町、鳥町をすぎ、郵政局の前で説法一席、花畠公園に陣取っては新市街の民衆に向つて獅子吼、そして目抜き通りの下通りをゆるがし、鶴屋デパートの横では、囃集する群衆に対して、こゝぞとばかりに立正安國の大義を雄叫ぶ。

この間、二、三の新聞記者が駆けつけ、取材を始めた。

妙寺の山主藤井日達師の法話が開かれた。

これは身延山学生布教隊の壮舉に隨喜した藤井山主が布教隊を激励するため蓮政寺の鬼木泰教師を介して宗務所の了解を得、今年八十才の高令にもかかわらず、わざわざ山鹿という山奥の道場から来寺されたもの。

ところが法話の寸前、藤井山主にあてた一通の手紙が、花岡山の道場から、あわただしくもたらされた。

手紙は、昨年十一月インドへ渡った藤井山主の高弟丸山行遠師から送られて来た最初の横では、囃集する群衆に対して、この間、二、三の新聞記者が駆けつけ、取材を始めた。

この手紙は、法話の劈頭、藤井山主によつて朗読披露された。それは次のような内容であった。

一週間の間、断食して立正安國を祈念した。

一、間もなく、インド最大の組織をもつサルボダヤ大会が開催され、インド首脳者は悉く出席した。この席上、十五分間の開会挨拶に次いで、私（丸山）が三十分間、講演した。

1、インドは中印国境紛争より、速かに手を引き、ガンディー翁の非暴力精神をとりどりとして、イシド本来の姿に帰らねばならない。

2、インド本来の姿は、秋尊に帰ることであり、それは王舍城を復興し、靈鷲山を再建することである。

3、靈鷲山の仏事は、やがて世界平和の道標となり象徴となるであろう。

一、この講演は、ラジオを通して全インド

に放送され、大きな反響を起した。また大会席上、インドの首脳者は悉く、深い感動をもって趣旨に賛同した。特に、「これこそインドの進むべき道である。

インドは中国と国境に争うことを好むものではない。速かに紛争を解決して、王舍城の復興に力を注ぎたい」と言ったネール首相は、さすがに涙ぐんでいた。

一、その後、王舍城復興委員会が結成され、五ヶ年計画、十五億円の予算が立案された。靈鷲山の仏事も、じよじよ具体的な実動に入り、「日本の仏法はインドへ帰る」と言われた日蓮聖人が予言が、実現されるようになって来た。

この手紙を読み終った藤井山主は、声を

大にして別動隊学生僧を勵ました。

「宗教家といふものは、死んだ人の葬式法

要をことゝするが能ではない。生きた人間を指導教済することをもって本義としなければならない。

また戦争犠牲者を供養することが能ではない。戦争を防止し、戦争なき平和な世界を生み出すことこそ本義としなければならない。

今や世界は核兵器によって、何時、阿鼻叫喚の地獄相を呈するか判らない危険きわまらない時代となっている。

かかる三界火宅を三界仏国に、大火所焼

の世の中を、我此土安穀の世の中にすることこそ、日蓮門下の使命である。

てはならない。全国津々浦、街頭に擊鼓宣令し、祖国を諸天擊天鼓の淨土をすべきである。

本日、身延の学生僧が、はるばる身延山から九州熊本まで擊鼓して来た。まことに宗門近年の壯挙である。

然し、世界は広い。狭い日本に閉ぢこもつていてはならない。一人でも多くの青年僧が、海外に如来の正法を伝えて行かねばならない。

海外を布教するのに、外國語の必要はない。弘めるものは南無妙法蓮華經の五字七字。されば、このお題目のみを唱えて擊鼓宣令すればこと足りる。

私もそうして來た。そして三十五年たつた今日、インドの靈鷲山の復興が、インド一國をうちて、今まで実現しようとして

くる。」

藤井山主の法話は終った。身ぶるいする  
上うを感動が起つた。それは身延山学生布  
教隊のみではなかつた。

### 三十三

午後一時、心氣あらたに布教隊は慈政寺  
を出發。熊本城を仰ぎながら上通り、白町  
慈崎宮前、淨行寺、立町、京町を行進、要  
所要所で獅子吼を重ね、市民の心田深く仏  
種をうえながら、午後三時、上熊本駅前広  
場に到着。

こゝで最後の街頭説法を行い、上田布教  
師会長の挨拶、日高隊長の謝辞あつて、布  
教終了。

吉井の布教以来三日間、はるばる熊本ま  
で行動を共にしてくれた本仏寺の伝道カー

も、感謝の擊鼓の中に、帰途につき、別動  
隊もまた、檀信徒の唱題に見送られながら、  
池田町の崇心教会へ向つた。

崇心教会は、本誌二月号に「出家の動機  
我れ仏子と生れ」という手記を書いた別動  
隊学生小寺崇元君の実家。別動隊は教会に  
到着するや、立正世界平和祈願を嚴修。

小憩あつて学生隊は、大場副隊長と共に  
花岡山の仏舎利塔へ參拜。一方教会では、  
満堂あふるる檀信徒に対し日高隊長が、  
「現代における菩薩行の在り方」を講話、  
つゞいて座談会を開き、

「唱題中に起る雜念は、どうすれば無くな  
るか」

「お經を読むだけで、罪障の消滅が出来る  
か」

「家族中の者が信仰するようになるには、

「どうすればよいか」

「世界平和実現のために、軍備は必要であるか、どうか」

といつたようなことについて、活潑を質疑応答を開いた。その中、仏舎利塔参拝より学生隊も帰って来、午後六時より、なごやかな晩餐会に入った。

これで九州布教中の、対外的な街頭布教の日程をおえた学生隊は、教会が学友の家であるだけに解放されたように安堵、疲労も一へんに出、早々に安らかに眠りについた。

### 三十四

翌ければ布教七日目。朝九時より、參集の信徒と共に立正世界平和祈願の唱題修行。十時より青年行学講習会。

の余地もなく、次々に集まる人々は屋外にあふれた。

さすがに植信徒関係の青年男女が多く、

遠く市外の玉名市からは、日高隊長の立正大学時代の旧友である妙法寺の浜崎義峰師人吉市からは林麓寺の安永日定師も来会。

また參集した青年の中には、学校の教職員が數名、人目を引いた。

講師は日高隊長。講習会の午前中は、官沢賢治の「雨ニモマケズ」の詩篇がテキストとして使用され、

「法華經信仰における深い人間の祈り」

とすることが論ぜられた。

次ぎに午後の部は、創価学会に対する批判から、更に日蓮宗青年運動の在り方が論ぜられ、座談会に入つて活潑な意見が交換された。

午後四時、研修会は一きわ盛況を呈して

終了。これによつて丸七日間、人間の体力  
気力の限界をこゆるほど、ぎっかりつまつ  
た九州街頭布教一切の日程は、無事に終つ  
た。

そしてその夜八時二十一分発の急行へ霧  
島へ、一路身延山への帰途についた。ブ  
ラットホームには羽柴宗会議員をはじめ數  
十名の檀信徒が、殺人的の雜踏の中に、高ら  
かに鼙鼓唱題しながら見送つていった。

なお日高隊長は一人残留、布教初日より  
予定されていた福岡県宗務所（北九州市八  
幡区枝光の宝塔寺）における研修会に臨ん  
だ。

### 三十五

り宝塔寺書院で開かれた。

地元はもとより門司、飯塚といふ遠方よ  
りも参集した北九州寺院住職、寺庭婦人会  
青年僧伝道会、在家青年会、一般檀信徒等  
の有志およそ百名あまり、書院三つの部屋  
をあけても廊下にはみ出、数日前の街頭布  
教の感激、なお去りやらぬ盛況。

木島所長の挨拶あって、門司大雄寺刀彌  
義昭師の司会により、

#### 「人間の滅罪と成仏」

と題した日高隊長の法話を本として、活  
発な質疑応答を展開。夕刻七時解散の予定  
は、九時まで延長され、更に「宗門青年運動  
の在り方」を討議。大いなる感動の中、  
一、各寺院に在家青年会を結成する。

さて、この日の研修会は、十三年ぶりに  
帰省した日高隊長を囲むもの、午後三時よ

り講習会を開催する。

一、各寺院は街頭布教の服装を整え、地域的に年何回か、合同の街頭布教を決行する。ということが決議された。

既に福岡県下には、青年僧による伝道布教隊は組織され、伝道カーも用意されており、足りないものは、地方では容易に入手し難い網代笠と、白の地下タビであった。

そこで日高隊長は、身延に帰山するや、鷲峰会学生と協議し、福岡県街頭布教の浄財の中より二万六千円を換出。一ヶ月もかゝって八方より求め得られた網代笠二十個を、福岡県宗務所へ寄贈した。たゞひたすらに福岡県下街頭布教の隆盛を祈って、全県が立てば全国が立つ。まず何処かの全県が立たねばならない。

の成果は、未熟なる学生隊の出動にもかゝわらず、予想以上といよりも、予想外といえるほど、あまりにも絶大であった。これひとえに木島所長、太田黒所長はじめ、福岡、熊本両県下の寺院各聖の熱誠なる御指導と、檀信徒の惜まざる御協賛のたまものであった。

殊に宿泊、中食、その他の御供養、貸切バス、伝道カーの提供、等々の特別のお計らいを頂いた方々、ならびに布教に参加された方々には、衷心より満腹の感謝の心を捧げるものである。

身延山鷲峰会を中心とする学生布教別動隊は、みずからを誇りとするよりも、布教に参加され指導、賛同された有名、無名の無量の日蓮門下の健在を誇りとする。

心を奮い起し、休暇のあるごとに全国各地と信せられるからである。

へ、へ何とかお役に立てば、と、身を挺して行くであろう。

またそうすることが、恩にあずかった方々に対する、せめてもの報恩の道である、

なむ、このたびの布教淨財は、今までと

同様、悉く本誌「寫経」拡充資金としたことを付記する。

(へわり)

## 何故信仰するのか

室  
談  
相  
仰  
信

おのれの業苦をかえりみなければ

切角の信仰もカラマイして来る



## おたずね

私が信仰に入つてから、もう随分久しく

なりますが、最近になつて、フト考へるよ

うになつたことは、

「何故、信仰しなければならないのか？」

「何のためで信仰するのだろうか？」

といつたことです。

さりとて私は、在家の信者として人さま

の手本にならぬまでも、恥しくないだけ

の信仰はして來たつもりです。滝に打たれ

寒修行にも出、身延山にも参り、お寺の毎

月のお題目講や御会式などのお世話をし、

家では朝夕のお勤めも欠したことなどありま

せん。

ところが或る日、私の子供から、

「何故、信仰するのか？」

と尋ねられた時、グキリツとして返答に窮してしまいました。無理に答えようとする

れば、それは、

「成仏のためだ」

「先祖供養のためだ」

「罪障消滅のためだ」

「現世利益のため」「幸福になるため」

と、一言にして言えそうなものゝ、然し

そう答えただけでは、どうも言い落した大

きなものがあるような気がしてならないま

ま、爾來これを問題として考え込むように

なりました。

然し、どんなに考えてみても、

と膝をたゝいて歓喜納得されるような解

答は、得ることが出来ません。

考へれば考へるほど、悩みは深くなり、

そう思って修行に励めば励むほど、却って

疑惑、迷妄は増して、遂には自分の信仰そのものにも、自信を失いかけ来るほどです。どうか一言の御教示を願います。

京都 宮田文夫  
鷲峰信仰相談室 御中

おこたえ

この種の質問は、いたる処で、よく尋ねられる問題です。

たものです。

従つて、信徒の多くが、こうした同じ疑問をもち、こうした疑問に悩んでいる、ということが出来ましよう。

さて私は、こうした質問に対し、これまで次のように答えてきました。

「信仰とは、へするもの」ではなくしてへさせられるものであり、またへしなければならないものでもなくして、実は、どんなにへしたくないものとして回避しても遂にはへしなければならなくなるものである」

たとえば身延山鷲峰会の学生僧が、休暇ごとに身延山布教別動隊として連日各地に街頭布教を開いていますが、その道中、宿泊した寺院ごとに講演会を行った後、現地檀信徒と共に信仰座談会を開いては、何處の座談会の席上でも、信徒の中から、必ずといってよいほど、こうした質問を受ける

もとより仏教の窮屈の目的は、自分個人のみならず、すべての人々が、そして全人類が、釈尊と等しき仏陀となつて、無量の仏陀の充満する通一仏土の世界を、この娑婆の地上に建立するということになります。

そこで、この大目的のために、一乗の菩薩行が、不自惜身命、広く展開されて行く

のですが、蓋し、こうした絶対能動的実践は、実は絶対受動的信仰より始まるものなのです。

信仰においては、絶対能動と絶対受動とは、本来、一なるものです。が、その一なる境地へ到達するには、本仏釈尊の毎自悲願を、全面的に受動する帰依、帰命より始まるのです。

境が現成されるのです。  
これを言いかえれば、全面的な絶対受動的信仰のない人間は、本仏釈尊の絶対能動的慈悲も感ずることが出来ないのみならず、一仏乗に住することも出来ず、従って、その功德を受けることも出来ない、ということが出来ましよう。

もとより本仏釈尊の慈悲は、あたかも太陽の光りのように、すべての人々に、平等にそゝがれています。然し、その慈悲の光りを受けるか、受けないかは、人間それぞれの受動性にあるのです。

たとえば医者が、すべての病人に対して平等に薬を与えて、その薬を飲むか、飲まぬかは病人の心によります。薬を必要と思わない者は、どんなに良い薬であっても

に、薬を求めるぐんでいた人は、工夫に暴雨を得たようだ、直ちに取って服用するでしょう。要は、その人に心身の苦悩が感ぜられていなければ、せっかくの良薬を与えても無駄になってしまうのです。

信仰も、またそうです。深刻な苦悩を感じている人ほど信仰も厚く、苦悩を感じてない人は、信仰もおきぎなりであるか、全く信仰の必要も感じないか、或は却って信仰を否定してしまうでしょう。

信仰は人がするのではなく、自分自身がするのです。お布施とかお経料だとかいう料金を支払って、僧侶に信仰してもらうものではありません。あくまでも信仰は、自分自身のものなのです。

そして信仰の母胎といつものは、人間苦、人生苦、家庭苦、社会苦、大いくいえば世

界の苦悩、そういうった苦悩にあるのですからこの苦悩を歎感に受動する者、深刻に感受する者ほど、信仰も深い、と申せましょう。

たとえばお釈迦さまさえも、生老病死の四苦を感じて出家修行されて行かれました。また日蓮聖人も、当時の仏教界の派閥争いと、國家の下剋上の乱れを動機として、これを解決すべく仏門に投じて行かれました。

従って信仰といつものは、人間の苦悩と、本仏の慈悲によってへさせられるものであります。ということが出来ましょ。

△信仰は、したがよいから、しよう

と思つても、或は、

△信仰は、しなければならないものである  
というから、してみよう

と思つても、その人自身に信仰に入るだけの苦惱がなければ、なかなか信仰というものは、義理や体裁などで出来るものではないのです。

ところが、入信の当初にあっては、深刻な苦惱によって、真剣な信仰がなされても、苦惱がうすくなればへ喉もと通れば熱さを忘れるの道理で、何時しか信仰もマンネリになるか、忘れ去られ勝ちであります。

そこで、

「これでは、いけない」

と思って、信仰に励んでも、遂には、  
「何故、真剣にならねばならないのか」  
「一体、信仰は何故しなければならないのか」といったような疑問が湧いて参ります。

それは、その人自身、苦惱に対する感覚性

が稀薄になつてゐるからです。

従つて、信仰に励もうと思えば、自己の根源的苦惱に対して卒直に感受しなければなりません。

人間の根源的苦惱……それは無常より始まります。無常をたとえていえば、死ということです。死に対する苦惱をみつめなくして真実の信仰は起りようはありません。

お釈迦さまは「四つの顛倒」を教えられました。それは常ならざるものを見、樂ならざるものを見、我ならざるものを見、淨ならざるものを見ることです。

人間すべて、この四つの顛倒に堕ち入っています。こゝに苦惱が起ります。法華経「壽量品自我偈の中には、人々を指して「顛倒の衆生」と呼んでおります。また譬喻品

の中では、この世の中を「三界火宅」と呼んで、

三界は安きことなし、なお火宅の如し  
衆苦充満して甚だ怖畏すべし

常に生死病死の憂患あり

かくの如きらの火 燥然としてやまず  
と警告しています。これが偽らない世の  
中の姿なのです。

従つて、顛倒の毒酒に酔つている人々も  
苦をのがれんとして苦をもつて対処してい  
る人々でも、遂には、のがれることの出来  
ない生老病死の人間の根源的苦悩に直面し  
て、信仰をへしたくないものへであっても  
へしなければならなくなるものなのです。  
成仏を願う以上、そこには仏陀の人格に  
遠い凡夫のみにさがります。罪障の消  
滅を願う以上、そこには罪障に対する深い

懺悔があります。先祖の菩提をともらう以  
上、そこには幽冥にさよう先祖の苦悩を  
我が苦悩とするものがあり、幸福を願う以  
上、そこにはぬぐい難き不幸があり、平和  
を願う以上、悲惨な戦いがあります。

そうした人間の業苦、自分自身の苦悩を  
直視する時、仏陀を仰ぎ、仏陀をたゝえて  
信仰をせざるを得ないであります。

世の中の濁悪、世界の対立混亂を憂え  
憂うほど、仏陀の淨仏国土をたゝえて、こ  
れを欣求せざるを得ないであります。  
要するに信仰とは、へするものではなく  
してへさせられるものであり、またへし  
なければならないものではなくして、実は  
へしなければならなくなるものなのです。

(おわり)

# 鷲峰行学研修会

釈尊在世当時の雨安居にちなんだ  
身延山鷲峰会の行学研修会そ  
れは期せずして本化の僧侶  
を栽培せしめた



## 編集部

身延山大学、高校の学生を中心とした身延山鷲峰会は、昭和三十七年夏以来、休暇ごとに身延山布教別動隊として、本山街頭布教実施困難な遠隔地方（東京、関西、信州、九州）へと長駆連日、果敢な布教を展開しては、みずから修行を重ねつゝ宗風を宣揚、今や鷲峰会の動向は、身延一山のみならず、全国宗門内外の注目を浴めるようになって来ているが、然し、この間、対外的布教に専念すればするほど、その反面鷲峰会自体、みずからを深くかえりみて、自己を内観するという、内省的機会を逸しているウラミがないではなかった。

釈尊在世当時の仏教々団の在り方をみると、かえってみても、毎年四月十五日から七月十五日までの雨季三ヶ月の間は、「雨安居」と称して仏弟子たちは一堂に会し、対外的布教活動は一切中止して、釈尊を中心に組

織立った教えをうけ、ひたすら内観を深めていた。

そこで鷲峰会学生の中でも、

「火のよう燃え沸る街頭布教もさることながら、水のよう静かに教学を探求し、唱題の正念に深く会当する行学研修の機会が欲しい」

という声が高まつて來、また他面、三月五日の身延山大学卒業式には、鷲峰会第一期卒業生が、いよいよ身延を巣立つて、全国各地に分散、布教の任につくところから、三月の春休みには、従来のように街頭布教を行ふのよりも、この際こそ一転して、卒業生と在校生とが、打つて一丸となつた行学二道の研修会を、何處かの山に籠つても、行うべき必要性に迫られていた。

もとより、この研修会が、身延在学年間の行学を総仕上げすると共に、今後における興学、布教の指針を明かにし、身延山を

中心として全国各地に、或は遠く海外までも、布教活動して行く鷲峰会僧侶の、異体同心の基盤を強化するものである事とは言うまでもない。

幸いにして、去る二月十六日、大阪市中之島公会堂における日蓮門下関西宗徒決起大会に臨んだ日高白象上人が、大会直後、かねて既懃であった大阪日蓮門下連合団の団長、南日常上人と会合、鷲峰行学研修の意向を伝えて協力を願つたところ、南上人はこゝろよく此の趣旨に賛同し、学生僧の意氣を仗として、言下に自分のお寺を全面的に開放するのみならず、研修中の食費等一切の出費まで負担寄進する旨を快諾。ここに研修会場は南上人の自坊である大阪府下、八尾市服部川一ノ谷の安国寺に、期間は三月十二日より十四日までの三泊三日間（三月十五日、身延布教本隊が瀬戸内海の小豆島街頭布教を決行する直前）と決

定、準備は着々として進められた。

なお研修会参加の爲峰会員は左の通り。

### 身延山布教部

日高白象

身延山大学卒業生（爲峰第一期生）

沢田覚象 藤塚義誠 藤森觀象

身延山大学三年

佐々木友学 木村義賢 和田吉弘

立正大学三年

深沢 保

身延山大学一年

石川義治 近藤達也 中島康策

但し身延山高校生は、学期末試験中のため、今回参加出来なかつたことが惜まれた。

2

身延山大学は三月五日の卒業式につづいて春休みに入り、本山大学生が休暇体制に入つたのは三月十日、その翌日、研

修会参加の一一行は、日高上人と共に街頭布教の姿も凜々しく、小豆島布教本隊に先行して、午後一時四十一分発の電車で身延を出発。

東海道富士駅では午後四時五分発の急行「よど号」大阪行に乗りかえ、終着駅大阪についたのは夜の九時三十分。駅頭、大阪の木谷菊太郎氏、龍野の花房毅君、奈良の坂本蓮子さんたち一行に出迎えられ、市内環状線の鶴橋駅で信貴山口行き電車に乗りかえ、山本駅では玄囃旗とナヨウナンを持って出迎えていた大阪日蓮門下連合団の佐野金之助氏、勝見富士太郎氏、徳永氏等々の幹部十数名の方々と合流、服部川駅についたのは夜十時三十分。

既に改札口には南上人をはじめ二十名近くの信徒世話人の方々が擊鼓して待機しており、ここで玄囃旗を先頭に隊列を整え、ナヨウナンや懐中電灯で足もとを照しなが

ら、擊鼓の法音、闇夜に轟かしながら安国寺へ向った。

人家のつきる頃、道は次第に坂道となり駅から歩いて二十五分ばかり、寒中なお肌に汗ばみながら安国寺の本堂の前に立てば、境内の諸堂は、一ノ谷の谷あいの要所に点在していて、まるで城塞のよう。

更に眼下は遙かに開けて、雄大なる百万ドルの夜景を見るが如く、大阪、神戸の街の灯が、墨をはいた闇夜に一面、さながら無数の宝石をちらはめたように輝いていた。

新書院であったが、この書院は、高峰会学生僧を迎えるため南上人が、二月十六日の大阪決起大会以来、わずか一ヶ月たらずの中、突貫工事で間にあわせたもの。壁も昨日ぬりあがったばかりで、しめつた壁にはまだ紙がはられていた。

附けば南上人自身、大手術をしたばかりの体でありながら、新書院を急造するため、

この急な坂道を、毎日木材をかついで往復すること、一日數十回に及んだといふ。

学生一同、部屋まで新築して迎えて下さった南上人夫妻の、並々ならぬ誠意と期待に深く、感動し、これに報ゆる道は、たゞたゞ不自惜生命の実践あるのみと、かたく心に誓わざにはおれなかつた。

夜十一時、本堂で法味言上、仏法の興隆と、これより始まろうとする三泊三日間の行学研修の無事成満を祈願。終って南上人の挨拶、隊員の自己紹介あって、寝についたのは夜半の一時すぎ。

隊員に当たられた部屋は、本堂につづく

翌る三月十二日は研修第一日目、この日朝五時起床、五時二十分より七時まで朝勤

唱題修業。龍神を祭る奥之院をはじめ諸堂

を参拝。案内に立たれた徳永氏の説明によれば、この附近には先住民族の塚が多く、称して「千塚」と呼ばれているという。また山麓まで昔は海であって、山腹に小池

の無数に点在するのは、先住民族が家ごとに飲料水に使用していた跡という。七時より、清掃、七時三十分より審問の食堂で朝食。南師夫人をはじめ連合団婦人部世話人の方々が、炊事を一手に引き受け、まめまめしく給仕していく。

朝食のすむ頃、奈良より遠山高子さん、

岩崎清次君、大阪より岩崎征夫君、神戸より荒牧キクエさん達が、続々応援にかけつけて来、研修会も一段と賑かになって来た。

さて教学研修は、午前八時より十二時ま

で、ぶつ通しで始まる。その眼目とするところは、

「仏教学上よりみた法華經成立の場に立つ

### 今後の日蓮教学への指針」

ということで、テキストとして平楽寺書店発行の紀野一義著「法華經の探求」が輪読に使用された。

研修項目は左の通り。

- 1、法華經々典成立の背景
- 2、仏滅年代考と正像末史觀
- 3、一仏乗と譬喻品の三車說、四車說
- 4、多宝塔の涌現とその意義
- 5、法華經における二處（天上と地底）の虛空會とその意義
- 6、地涌の菩薩の出現とその意義
- 7、久遠の本仏と人間釈尊
- 8、本釈尊と諸仏と諸神の關係
- 9、法華經々典中における仏舍利供養の贊否
- 10、法華經の菩薩像と僧伽の在り方

以上十項目をテーマとして輪読が続けられたが、テーマがテーマだけで、旁聴は自

由ではあっても、一般初心の信者に対しても

公開するには、さすがに躊躇せざるを得ないものがあり、南上人の漏すところによれば、「こういふテーマでなければ、折角の機会であるから、連合団の会員すべてに案内して、講話も聞いてもらい、座談会にも出てもらひ、また街頭布教にも参加してもらいたいところだった」ということであった。

ちなみに連合団の会員は、およそ数百世帯といふ。若しも仮に、教学研修のテーマが一般公開をはゞからぬものであったとしたならば、数百世帯の会員を動員して、講話・講義にしても、座談会にしても、はたまた街頭布教にしても、それこそ空前の盛儀となつたことであろう。然し、今度の研修の主眼とするところは大衆教化にあるのではなく、あくまでも総峰會学生僧一人一人の内省と内観に資する

ものであった。

そこで、折角の機会でありながら、大衆布教を後廻しにしただけに、学生僧の教學研修は冒頭より白熱化して行つた。

#### 4

輪読テキストに使つた「法華經の探求」という書物は、法華經を位教学的立場から取扱つた多くの仏教学者の所説を集約し、その上に著者の所見を加えたものであるが要するに法華經々典の歴史的成立背景をたずね、そこから本来の意義を見出そうと試みたものであった。

然し本書は、その限りに留まり、法華經々典が成立するに至るまでの過程ばかりを強調して、既に成立している現存の法華經々典そのものの権威、並にそれが色説実践される時、顕現して来る成果、功德ということに關しては、殆ど触れるものはなかつた。

十二因縁にも順観と逆観があり、法華經經典にも方便品を中心とした順説と、寿量品を中心とした逆説とがあるよう、法華經の成立に與しても、成立過程から、現存の法華經をみる立場があると同時に、現存の法華經から、その成立過程をみる立場がなければならない。

しかも強調されるのは後者の方であり、

更にそれよりも強調されねばならないのは現存法華經色説実践の信仰体験である。

ところが本書に限らず、この種の書物には、後者の二方が殆ど説かれていなかつた。そのため法華經を専攻する大学の学生僧の中でも、この種の書物によつて却つて信仰が惑乱され、或は信仰を喪失する者が少くはなかつた。

然し幸い日高上人が、この点を充分に心得ていて、法華經成立に関する仏教学的立場から日蓮聖人の教義へ、日蓮聖人の教義

から仏教学的立場へと、おまかながらも一本づらぬいた確呼たる筋を堅持していった。そこで私峰会は、日高上人の指導のもとあえて本書をテキストに使用したのであるが、これを敢えて使用した所以のものは、中には、法華經信仰に対する確信を失う者が、あまりにも多いといふこと。

2、一方、従来の伝統的日蓮教学を専攻する者の中には、天台学の亞流におち入ってしまつて、あまりにも独善が多く、且つ独善が強いといふこと。

3、そして現段階にあっては、法華經の研究に關して、進歩的な仏教学的立場と、保守的な日蓮学的立場には、大きな断層或は障壁が出来ていて、殆ど会通らしい会通もされていないといふこと。

4、のみならず学界の大勢では、既に天台学上よりみた法華經の權威は失われ、む

しろ仏教学的立場から、法華經の権威が立証されつゝあり、今後、法華經を世界的聖典として弘めようとするならば、仏数学的立場を充分に咀嚼しておらねばならない」ということ。

5、とあれ日蓮聖人の教義は、七百年前に樹立されたものであるにもかゝわらず、仏教学的立場から決して破れ去るものではなく、却って仏数学的立場を開会する権威をもつてゐるということ。

かくして教学研修は、「法華經の探求」をテキストとしながら、テキストに呑まれるようなこともなく、これを輪読討議して、研修眼目である「仏数学上よりみた法華經成立の場に立つ今後の日蓮教学への指針」が究明されて行つた。討議は真剣そのものであり、まさしく火花を散らすようであった。討議された前述十項のテーマの中、特に問題となつたのは

傍聴者側より起つた「多宝塔の実在観」と「釈尊以前に十界中の仏界があつたのか」、「釈尊の関係」ということであつた。

中でも、激論が戦かわされたのは、

「釈尊以前に本仏が実在したか」

「釈尊以前に十界中の仏界があつたのか」

といふことにまでも論及されたことだつた。論戰は教学研修時間以外、小憩中でも、食事中でも、そして就寝してからでも、暇さえあれば直ちに展開された。それほど学生は、この問題と真剣に取り組んでいた。

やがて本誌の上でも、この時の研究テーマについて、所見が発表される機会があるだろうが、蓋し、こうした諸問題を解決した上で、法華經実践でなければ、今後、世界の有識者に法華經を弘めるとは困難となつて来るであろう。鷲峰会学生の中でもこうした問題に初めて直面して、面喰つた者もいたが、多かれ少なかれ衝撃を受けな

い者はなく、またそれが今後の興学のため大きな刺戟となつたことは確かであった。

## 5

午後は服部川の町と、それより一里はなれた山本市街における街頭布教であった。玄題旗を陣頭に威風堂々、参加の檀信徒と共に、市中を擊鼓行進し、山本駅前では小一時間ばかり次々にマイクを通して街頭説演をすれば、街の人も、通行人も、そして駆け出で入りする乗客たちも、もの珍らしげに足を止めて聞き入っていた。

教姫は次々に配られて行つた。教姫には次のように記されていた。

### 1、人間礼拝に徹することこそ

信仰実践の極地である

2、祈りなき平和はあり得ない  
敵をも慈しむ心を深めよ

久遠の光りはその祈りより生ず

数時間の街頭布教を終り、安国寺に帰山

して直ちに夕勤に入つたが、この時、南上人が、やゝ夕勤に遅れた。

その理由は、後で判ったことだが、この街頭布教中、無理がたゝって大手術後の傷が破れ、下半身、鮮血にそまっていたのを風呂で洗い落し、サラシ一屢を腰に巻きつけた上、服装を改めていたからであったといふ。

それにしても、あれだけの出血に微動だもせず、若い学生僧と終始行動を共にされた南上人の不動の信力には、驚嘆敬服せざるを得なかつた。

夕勤の後、夕食と入浴、そして七時より二時間、再びテキストの輪読と質疑応答のデスクッション

夜九時半から十時半まで一時間の唱題修行は、太鼓も木槌も用いず、一同、正念を正し、呼吸を整えた唱題修行。これは初めての試みであったが、今まで太鼓や木槌の

調子に頬っていったのを排して、各自唱題の一念を奮い起し、これを本として唱題の呼吸を調和するものであつただけに、必然曾つて体験したこともない感動が呼び起され、道場全体が、そのまま仏界であるかの如き觀を深くしたことだった。

## 6

翌くれば研修第二日目、この日は終日、降りしきる雨、予定していた八尾市街の街頭布教は、明日に延期せざるを得なかつた。

然し早朝より、京都教法院の特命布教師三木淨達上人が、長男隨法君（立正大学一年）と共に京都より駆けつけて研修会に参加、また大阪より岡本組の会長岡本宗治氏が数名の社員をともなつて陣中激励に来られ、研修会はいよいよ高調した。

岡本氏は身延山の特別大本願人であり、且つ太本山池上本門寺と京都大本山妙顯寺村雲瑞龍寺と大阪妙徳寺の総代を兼ねて、

ひたすら宗門興隆のため尽力されている篤信者であるが、岡本氏が鷲峰会学生を激励するため、約一時間に亘つて語られた氏自身の信仰体験談は、破壊万丈の半生をつらぬいた不屈の法華經信仰の在り方として感銘おく能わざるものがあり、聴く者、誰一人として涙ぬぐわない者とてなく、謝辞を述べようとした日高上人自身、壇上、嗚咽してしまつたほどだった。

こうして此の日は終日、雨に降り込められ、午前中は三木上人・南上人・岡本氏を囲んだ座談会、午後より再びテキストによる輪読、討議をつけたが、夕刻には鷲峰会学生和田吉弘君の御両親である布施宝樹寺の和田龍遵上人（大阪布教師会長）夫妻も陣中見舞に来られ、また奈良より八田豊子さんも来山し、デスカッショーンの緊迫した中にも、和氣アライアリたるムードが添えられた。

然し討議は、互に納得するまでつゞけられ、就寝したのは夜半一時をすぎていた。

7

研修第三日目は朝食後、直ちに昨日の予定であった八尾市街の街頭布教に出発。山本駅のプラットホームで、安国寺へ駆けつ

けていた奈良妙要寺の大島鳳静上人（奈良宗務所長）と出あい、一緒に八尾へ向った。隊伍わずか數十名ではあったが、みな一騎当千の意氣にもえていた。街頭布教は八尾の駅頭、日高上人の第一声によって切って落された。

八尾は山本に数倍する市街、市民はトウトウたる法鼓、インインたる獅子吼にドギモを抜かれたかのように、軒さきに人垣をつくって眺めていた。

こゝでは身延山学生僧のみでなく三木隨法君も花房教君も、マイクを握って堂々と立正安國の大義を宣説し情勢を加えた。

人通りは激しく、身延より用意して来た一万枚の教箋は、昨日の山本布教と共に、またたく間に無くなってしまった。

さて午後一時より安国寺において日蓮門下関西地方青年会有志を囲む座談会が開かれた。

この座談会は、身延山鷲峰会が、今度の研修会を行った好機に、今まで街頭布教で結縁された関西地方の門下青年会へたとえば大阪日蓮宗青年会、京都日蓮宗青年会、奈良立正青年会、中部行学会）等々に呼びかけ、互に青年会の交流を計りつゝ、その中より、今後の青年会活動に対する大いなる道を発見し、創造しようとしたものであつて、関西地方においては、初めて試みられる大規模な連合座談会であった。

座談会は、奈良の大島鳳静上人が座長となり、日高上人が司会を担当して進められた。まず各青年会代表によつて、それぞれ

各地で行っている青年運動の現況が紹介され、次いで、

「青年運動は、青年僧だけのものであってはならない」

「社会的力をもつには、どうしても在家青年運動を起すべきである」

「それには一体どうすればよいか」

「そういうことが中心議題となつて、活発な意見が交換された。なお、これに対する日高上人の意見は、本誌三月号と四月号の信仰相談室の中で、

「青年よ、街頭に誓願宣令せよ」

「青年よ、法華經の思想と祈りをもて」

と題して述べているので、こゝでは割愛するが、更に日高上人は、

「日は東より出て西へ入る、日本の仏法の

月氏（インド）へ返るべき瑞相なり」

とびう、謙曉八幡鈔における日蓮聖人の予言を読み上げた後、インド盡石山における

る仏教復興運動の現況を、図解をもつて克明に紹介し、

「日蓮門下青年は、日本国内ばかりにとらわれてゐてはならない。海外にも眼をむけよ。時は迫っている。

靈鷲山を復興し、この山を本としてインドの立正安國運動を、日本国と相呼応して全世界へと展開して行かなければならぬ。

靈鷲山と身延山とが、お題目によつて結ばれる時、広宣流布の基盤は定まり、世界恒久平和の見通しが立つ。六老僧日持上人の跡を追つて、西天インド開教に身を挺する者はいないか。それは誰か」

と声を励し、更にインド開教に関する注意の一つとして、ヒンズー教学をかゝげ、

「ヒンズー教学は、仏教の空觀思想を取り入れて、これを大成し、却つて仏教がヒンズー教の真似をしてゐるのだ」と豪語

しているが、世界の宗教の中、仏教の最大の敵となるものはギリスト教でもなく、マホメット教でもなく、實にヒンズー教である。

讀者の語るところによれば、ヒンズー教の空觀思想を打ち破るほどの仏教学者はまだ現われていない。むしろ仏教学者がヒンズーの空觀思想を学んでいるような有様である」という。

そこで若し、インド開教中、ヒンズー教と対決しようとすれば、それは法華經に説かれている菩薩道の実践そのものによるほかはない、ということを深く肝に銘じておかねばならない。

それと同時に、法華經を宣布する上においては、必ずや他の宗教と対決する。従つて、これを折伏開会するほどの教學と実践を、日頃から身につけておかねばならない」と警告、学生僧をして胸ぶるいするほど

に奮起せしめずはおかなかつた。

こうして座談会は、鋭い氣鋒のみなぎる中、

「各地の門下青年会の交流を計る会合を、今後も機会を作つて、しばしば開催する」ということが決議された。最後に一同を鼓舞感激せしめたのは、南上人の言葉であった。

それは、

「このたびの行学研修会は、短期間ではあつたが、非常に有意義であつた。こうした青年の異体同心となつた行学二道の研鑽の中から、眞実の正法は興隆されて行くであろう。

安國寺は別名、一の谷信行道場とも称せられてゐる。私は、こうした研修のためならば、何時でも道場を開放奉仕する。私としては駄峰会の研修会を、年に二回くらいここで開いて欲しいと思う。然し駄峰会と

しては年に三回しかない休暇、全国各地の布教に出かけるのであるから、二回も此処に集ることは出来ない相談であろう。然し少くとも年に一回は必ず、此處で、こうした研修会を開催して欲しいと思う」

ということであった。

## 8

三時間半に亘る座談会終了後、大島上人導師となつて立正世界平和祈願法要を嚴修。つゞいて懇親の晩餐会、解散したのは夕刻六時三十分。

七時より研修会最後の反省会に入ったが、参加者が等しく口をそろえて述べた言葉は「この研修会は本当によかったです。これほど成果があがろうとは、夢にも予想しなかった」

「鷲峰会僧侶」という言葉が、今まで時々使われていたが、その頃は、僧侶の実体も尊さもビンと来なかつた。然し今、それがし

みじみに判つて来た」

「三宝帰依は朝夕の勤修の時、必ず行つていることだが、三宝の中の僧宝とは、僧侶のことである。朝夕、僧侶帰依の礼拝は行って來たが、今こそ帰依すべき僧侶の尊さを見出した思いがする」

「今後の布教は、実感をもつて三宝帰依を実践せしめることであり、特に失われている僧侶帰依を復活しなければならない。寺院も教会も結社も、僧俗のつどいところ、そのまゝが帰依礼拝するに足りるほど尊い僧侶でなければならぬ」

「宗門の興隆は、本化の僧侶を涌出形成し拡充することにほかならない」

「我々は鷲峰会僧侶の一員であることを誇りとする」

反省会の後は、一時間に亘る最後の唱題修行。太鼓も木槌もうたず、ひたすら心も呼吸も一つにして、大音声に唱題する人々

の臉は、深い感動にぬれていた。

これひとえに南上人夫妻をはじめ大阪日蓮門下連合団幹部世話人の方々の献身的奉仕、京都、奈良、大阪方面よりかけつけられた大島上人、三木上人・和田上人・等々の諸師の温い指導、そして大阪の岡本氏、奈良の遠山さんをはじめ各地より参加された篤信の方々、特に在家青年各位の熱誠があふれる協力のたまものにはほかならなかつた。

9

トホームで、騒鼓して見送る南上人夫妻、岡本夫妻をはじめ、大阪日蓮門下連合団幹部の方々、奈良立正靈山会の方々の姿が、輝しき「菩薩の群像」の如くに見うけられた。

(おわり)

第六回

身延山青年行学講習会案内

期間	八月二十五日～二十八日		
場所	身延山西谷祖廟常経殿		
主催	身延山布教部		
役員	主任	布教部長岩間	湛良師
	副主任	布教部員日高	白象師
会費	二千円(宿泊代)	米一升(代金可)	
	問合せ申込みは身延山布教部へ		

翌れば三月十五日、この日は瀬戸内海小豆島の街頭布教、朝八時に神戸の三宮駅で、身延から直行する布教本隊と合流するため、未明四時に起床。朝勤後、ようやく白みかける一の谷安国寺をあとに、舉鼓して山を下った。

大阪駅発七時十二分、神戸へ向う列車の窓からは、朝のラッシュに雜踏するプラツ

# 新たなる人間形成

身延山青年行学講習会に参加して

同志者大学生

岩

崎

征

夫

去る三月二十六日から二十九日まで三泊四日間、身延山西谷信行道場において開かれた第五回青年行学講習会に参加しました。主任は奈良県桜井の妙要寺住職大島貞静上人（奈良県宗務所長）、副主任は身延山布教部の日高白象上人、参加した青年男女は四十七名、遠くは秋田県、福岡県からも駆せ参りました。

スケジュールは本山祖師堂における朝勤参拝以来ぎっしりとつまつっていました。数名の講師による連続講義、夜は活発な座談会が毎晩おそらくまで行われました。

然し、それは到底言葉では言い現わされるものではありませんでした。へ心の線にふれるものがあつたからだ」といったようなものでもなく、若し納得される表現があるとすれば、それは、

特に三日目の奥の院登説、そして山頂杉のそばの記念植樹、四日目未明三時半よ

「人間本来、誰でも持つており、魂の奥底

をたいた森厳な唱題修行等々、それらは終生忘れられない思い出となることでしょう。

講習生は誰一人として深い感動をうけない者はいませんでした。講習終了後、家に帰っても去りやらぬ此の感動を、静かに幾日も幾日も自分自身にふりかえってみました。



に秘められていた何か素晴らしい偉大なもの

それは何だか判りません。或は仏性と  
でも呼ばれるものであるかも知れません。  
兎も角、今まで気付きもしなかった新しい  
自分自身が、まるで噴火した巨大な溶岩の  
ように流れ出して来た』

といつたようを感じました。

新しい人間形成で、今まで慣らされて來  
た世界から未知の世界への飛躍、その断層  
には孤独の淵がのぞいていました。孤独と  
は過去の自分自身に対する愛憎の念でした。  
不自惜生命とはどういう危機を突破する誠  
めにほかなりません。

私は、身延山から流動し始めた私自身の  
溶岩が、果して如何なる岩となり、如何な  
る山塊となるか、更に信仰を深め重ねて行  
きたい、と願っています。

そして青年と手を取りあって、純粹な発  
刺たる集いを拡充し、仏祖の願業に役立つ

て行きたい、と切念するものです。

講習会後もなく、主任講師をされた  
奈良県桜井の大島上人から、毎月発行さ  
れている伝道ハガキが送られ来ました。  
それには次のように記されていました。

身延山で開かれた青年行学講習会の訓育  
主任として、青年と共に起居した体験は貴  
重であった。

白蓮聖人が「未来際までも心は身延山に  
住むべく候」と仰せられた身延の靈地に、  
全国から集った青年、それも初参加の高  
校生が多數、朝五時から夜十一時まで板  
間に正坐して、講義を聴き、太鼓をうち、  
足がしびれてころぶ学生も多いという、ま  
ことに苦修練行であった。

然し、その苦しさの中に何を摑んだのか  
閉講式には全員声をあげて泣いた。桜井か

「八月の休暇中に開かれる次の講習会にも是非行きたい」

と話しあつていると聞き、私は自分の

使命を果したような気がしてホッとした。  
安易な生活を追う現代青年にも「何か求め  
ている」とことが実証されたわけだが、それ  
を日頃与えることが出来ないのが、問題で  
あると思われる。

詩人宮沢賢治は、

「南無妙法蓮華經と唱えることは、いかに  
も古くさくて、迷信らしく見えますが、い  
くら考へても、調べても、そうではありま  
せん。どうにも行く道がなくなったら、一  
心に念じて唱えて下さい。・・・」  
と書いている。お題目を唱えることは、  
勇気と情熱を呼び起し、人間の心の歪みを  
正す力となることを、強く信じていた者の  
言葉といえよう。

## 読者へのお願

本誌は身延山の学生僧が、宗門青年運動の興隆をめざして、文字通り死にもの狂いと思われるばかり懸命になつて発行しているもの、ようやく脚光をあびて参りました。ひとえに読者皆さまの御協力のたまものと感謝しています。

但し今の所、一冊単価送料共七十円以上もかかっていますので、一層の御支援をお願い致します。

一、誌代未納のお方は、出来るだけ早目に御納入下さいますように。

一、志ある読者は賛助会員（年間三千円の志納）として御支援下さいますようよせ下さいますように。（発送部）

（おわり）

編集後記

號五月大号

第二卷 第五号  
通卷第十一号

定価五十円

昭和三十九年四月二十日 印刷

昭和三十九年五月一日 発行

編集兼发行人 日高白象

印刷所 甲府市東橋町一八 天野謄写堂

発行所 山梨県身延町身延山久遠寺内

身延山號會

電話(身延山)二番・三番

振替(甲府)二〇九三番

誌代半年分 三〇〇円

一年分 六〇〇円

贊助会費一年 三〇〇〇円(分納可)

◇三月の大阪における鷲峰行学研修会、小豆島街頭布教、岡山街頭布教、身延山青年行学講習会。四月に入つて本年一期信行道場、清澄山開宗会布教、東京街頭布教と行事がつゞき、本誌日高編集長がその涉に当ったため、本誌四月号以来、編集もおくれ、発行もおくれてしましましたこと、謹んでお詫び申上げます。目下正常へ復するよう銳意努力中です。御了承下さい。

◇「九州街頭布教紀行」は本月号で完結しました。紀行文中、講演内容とか山本日説上人伝、その他の搜話のため勢い長文となり、二月号以来三回に亘りましたが、好評を頂いたことは幸いでした。今後一層鷲峰会の活躍に御期待下さい。

(編集部)